現代の
心理学と家族関係の問題

数年前、私は幸運にも、ニューヨーク市のアッカーマン研究所所長であるピーター・スタイングラス氏の講演を聴講する機会を得た。ピーターのテーマは、富裕層の家庭における経済的資本の問題であった。ピーターは、ジークムント・フロイトの言葉を私の意識に呼び起こしてくれた。その言葉は、経済的資本を人生に健全に統合することが、いかに困難であるかという私の取り組みを具体化してくれた。 ピーターは、ジークムント・フロイトが、幸福で調和のとれた人間生活の二大源泉は、個人が「愛すること」と「働くこと」を学ぶことにあると述べたと説明した。ここで「働くこと」とは「天職」と定義される。また、幸福を損なう二大要因は、性や金銭に関わる問題であり、中でも金銭の問題が最も困難であると指摘した。 ピーターはさらに、20世紀後半の私たち現代人は、性について語り、それを成人生活にある程度うまく統合できるようになったという点で、19世紀から20世紀初頭のフロイトの見解から大きく前進したと指摘した。一方で、金銭の問題は依然として私たちの多くにとって大きな課題であり続けている。とりわけ、金銭はあらゆる文化において、教養ある人間が口にすることのできない唯一の話題であり続けているからだ。それは、今なお残るタブーの話題なのである。 「では、人々はどのようにして、

？ 私たちは皆、ピーター・スタイングラス氏や、この分野における生きた、あるいは故人となった他の偉大な先駆者たちのような人々が存在し、お金の問題やそれを健全な生活に統合することについて対話を始める手助けをしてくれていることに、極めて幸運です。ピーター、ありがとう！

では、お金という大きな課題を前に、心理学という科学は、家族がそれを生活の中にうまく統合しようとする際に、どのような洞察を提供してくれるのでしょうか？

家族システム理論　人間関係における多様な相互作用

関係性

まず、家族内の関係性によって構成される家族システムに注目することから、この旅を始めましょう。そこでは、家族が保有する資産の大部分が、継続中の事業あるいは投資された金融資産という形で、先代から相続されたものです。したがって、これらは少なくとも第2世代、第3世代に及ぶ家族となります。 ここで議論する考え方は、第一世代の資産を持つ家族にとっても有益であることに付け加えておきたい。彼らが、これから私が明らかにする問題を回避するために必要な家族ガバナンス体制を構築する際、また、その体制を機能させるために家族構成員に必要な教育を提供する際に、これらを活用すればよいのである。こうした関係性のシステムは、一般的にどのようなものだろうか。私の経験では、それらはしばしば二つの

相互に結びついたネットワークのセットとして現れます。1つ目の関係セットは、個々の家族構成員を「血縁家族」の一員として互いに結びつけるものであり、2つ目は、彼らを金融資本の共同所有者として結びつけるものです。 個人の側面では、家族構成員は私が「私」の役割と定義する役割を担っています。例えば、親、子、配偶者、義理の家族、祖父母、曾祖父母、兄弟姉妹、叔母・叔父、いとこ（多くの場合、第一、第二、第三のいとこ）、名付け親、そして様々な種類の継親関係などです。

金融資本の共同所有という側面では、家族構成員は私が「私たち」の役割と定義する役割を担っており、例えば、 受益者、受託者、保護者、家族私設信託会社の持分所有者、私設信託会社の取締役、私設信託会社の従業員、法人の株主・所有者または経営者、家族パートナーシップ、有限責任会社、またはパートナーシップのパートナー（有限または無限）、家族慈善団体の構成員および／または管理者、そのような慈善団体の助成金委員会の委員など、枚挙にいとまがない。 多くの場合、個々の家族構成員が担うこうした役割の数は、家族の金融資産管理システムにおいて必要とされる特定の種類の法人の数が多くなることで、大幅に増加することになります。

私がある家族の旅路に同行する際に行うことの一つは、これらすべての関係性を図式化して提示することです。可能であれば、こうした家族構成員のほとんどが、「私」と「私たち」という役割の間で18から21組の関係性を持ち、それらが合わさって家族システム内における個々の関係性の網を構成していることを想像してみてください。もしあなたがそのような家族の一員であるなら、読み進める前に、ぜひこの演習を

。専門家の方々は、ご自身が「信頼される存在（personne de confiance）」として関わる家族について、今すぐ同様の図を作成してみてください。なお、完成した図は、絡み合ったスパゲッティの皿のような見た目になるはずです。それでは、続きを読み進めましょう。

おそらく、皆さんそれぞれがすぐに18〜21の個別の関係性を挙げたものの、兄弟姉妹が複数いたり、個々の人物としてのいとこがいたりといった各カテゴリー内の複数の要素、あるいは例として挙げた家族限定パートナーシップなどをさらに追加して数を増やそうとはしなかったのではないでしょうか。それは、多額の資産を持つ家族内における人間関係や金銭関係の複雑さが並外れており、実に畏敬の念を抱かせるほどであることを、単に「理解した」からに他なりません。 心理学の入門講座で教えられるように、人生における各人間関係を管理するには一生涯にわたる実践が必要であることを加味すれば、家族関係の管理が、私たちが常に考えてきた通り、実に困難である理由が理解できるでしょう。 また、家族関係の複雑さに対する私たちの直感を、具体的かつ感情に流されない形で明確に表現する方法も得たのです。さらに、家族が意思決定を行うたびにどれほど多くの関係が動員されるかを、おそらく初めて理解したことで、共同意思決定の技法である「ファミリー・ガバナンス」がなぜこれほど驚くほど難しいのかを実感するのです。

その認識に加え、適切な家族による共同意思決定の問題をさらに困難にしている二つの現実があります。

それは、家族構成員が各関係を定義する境界線を区別できる必要があること、そして各

家族構成員が、それぞれの関係を定義する役割と責任、そしてその実践について教育を受ける必要があるということです。

心理学の主要な教えの一つは、良好な人間関係を築くための適切な境界線の重要性についてです。ロバート・フロストの詩にある「高い石の壁こそが、良き隣人を作る」という戒めが思い浮かびます。私たち皆が知っているように、またそれぞれの家族内にも例があるように、重要な人間関係において適切な境界線が設けられ、その関係がうまく機能したケースもあれば、境界線が不十分で、同様にうまくいかなかったケースもあるでしょう。 しかし、近親者との18〜21もの関係を持ち、それらのそれぞれの境界線を適切に管理しつつ、ある関係が同じ相手との別の関係に波及して、両方の関係を混乱させてしまわないようにするのは、どのようなことか想像できますか？例えば、親が子供と会話している一方で、その子供が受益者である信託の受託者であり、かつ子供が従業員として働く法人の所有者でもある、といった場合です。 私たちが議論しているような家族内における境界線の問題が、いかに管理が難しいか、お分かりいただけると思います。この章の後半では、こうした問題をうまく管理するための実践法について説明します。

さて、同じ例に、私たちの大半には、実地研修を除いて、優れた親になるための教育を受ける実質的な手段がないという事実を加えてみましょう。優れた受益者になるための受講できる講座は存在せず

受益者になるための講座は存在しないため受講できませんし、優れた受託者になるための講座もほとんどなく、家族企業の優れたステークホルダー所有者になるための講座もなく、家族企業の優れた経営者になるための講座もほとんどありません

企業を経営する優れたマネージャーになるための講座もほとんどありません。したがって、経済的に裕福な家族のほとんどの構成員が、家族の財務上の意思決定において求められる複数の役割を優れた形で果たす方法について教育を受けていないという事実と、ほとんどの人間が境界線の設定に苦労しているという点を組み合わせると、ファミリーガバナンスの実践においては、しばしば混乱や停滞が生じることになります。

多額の資産を持つ家族が、その多様な人間関係を管理する上で直面する最後の複雑さは、彼らのアドバイザーのほとんどが、その家族の意思決定システムがいかに真に複雑であるかを理解していないという点にある。 ほとんどのアドバイザーは、複雑系理論、心理学、組織力学の学習が必須科目ではない専門分野出身であるため、家族システムに関する知識は、各自の現場での実務経験を通じて得たものに過ぎない。こうした学習なしでは、彼らが直面する家族関係の問題に対処する準備が整っている者はほとんどいないため、これは彼らが支援する家族にとって悲劇である。

こうした知識の欠如により、彼らは、家族の金融資産の適切な所有と管理に対処するために新たな組織体を設立するたびに、その関係性の網の目の中で自ら生み出してしまう境界の問題を理解する準備ができていないのです。

適切な所有権と管理を行うために新たな組織体を創設するたびに、彼らが自ら生み出す「境界の問題」を理解する準備ができていない。この最後の現実こそが、しばしば家族の関係を崩壊させる「最後のとどめ」となる。なぜなら、家族構成員は、その運営における自身の役割や責任を理解するための教育も、新たな組織体が繁栄するために管理が求められる新たな境界の問題を理解することもなく、全く新しい一連の家族関係からなる組織体を受け入れることになるからだ。

では、家族のガバナンス体制には、あまりにも頻繁に何が存在しているのでしょうか？それは、信じられないほど複雑な人間関係の集合体であり、そのシステム内における各関係での役割や責任をどのように果たすべきかについて、家族構成員への教育がほとんど、あるいは全く行われていない状態です。その結果、境界線が極めて曖昧になり、最良の場合でも、それに伴う混乱が生じることになります。 こうした欠陥を抱えた家族システムでは、家族の幸福のために各関係において必要な意思決定を家族構成員が試みるにつれ、最終的には甚大な疲労が表れる。これらの家族のガバナンスシステムにおける、疲弊した意思決定プロセスという形をとったエントロピーが、その中心でその力を発揮しているのだ。

では、このような信じがたいほど複雑な状況にある家族に対して、心理学はどのような支援ができるのだろうか？

マレー・ボーエン

まず、マレー・ボーウェンの画期的な業績と、彼の「家族システム理論」から始めよう。[1] マレー・ボーウェンは、家族を専門とする臨床心理学者であった。彼は1940年から70年代にかけて積極的に臨床活動を行った。 それ以前には、その実践をほぼもっぱら家族に焦点を当てていた心理学者はごくわずかでした。ボーエンは、家族が「システム」であることを先駆的な視点で捉えました。彼は、当時新たに台頭しつつあった「システム論」や「複雑系理論」といった科学的理論を家族関係に適用することで、その複雑な関係の網がどのように機能しているかを解明できると気づきました。彼は、家族がセラピーを必要とするようなケースにおいては、それらの理論から得られた考え方を応用できると見ていました。

彼らがウェルビーイングを達成できるよう支援するための手法。その後、ボーエンは自身の考えを具体化するために研究所を設立した。一連の発見を通じて、各家族構成員への綿密な質問や、家族同士の相互行動に対する綿密な観察を行うことで、彼は多くの不健全な家族行動の定義と記述を確立し、その改善に向けた治療的提案を行うことができた。 家族とその意思決定システムに関する心理学および健康への彼の貢献は画期的かつ多岐にわたり、すべての家族の長やその「信頼できる人物」が全体として学ぶべきものであるが、ここでは、健全な家族を実現する上で特に役立つ彼の研究の一分野について論じたい。ボーエンは、家族システム理論に「三角関係」という概念を導入した[2]。 ボーウェンが示唆しているのは、宇宙において三角形が最も強固な形態である一方で、家族関係における三角形は最も脆弱である、という点だ。彼は、一見すると二者間の関係に見えるものに第三者が存在することを見出し、その第三者がどのように関与して他の二人の関係を機能不全に陥らせているかを特定できれば、それによって形成された不健全な三角関係を「崩壊」させることができると、見事に洞察した。 彼は、当事者二人が自分たちの関係が第三者によって阻害されていることに気づけるよう手助けすることで、これを実現した。「トライアングリング」というこの新たな認識は、家族の中で機能不全的な行動がどのように生じるかという家族療法士の理解を永遠に変えた。また、三者が相互作用することは初期システムの定義の一つであるため、この理論は「家族」システムという概念を具体化する一助ともなった。今日、トライアングレーションと家族システムの概念は

すべての家族療法士の臨床実践に取り入れられ、多くの家族における苦しみを実際に軽減する結果につながっている。さらに、三角関係は家族システムと同様にあらゆる人間システムに広く見られるため、これらの考え方はあらゆる種類の人間関係に関する支援活動へと広がっている。多くの読者はここで三角関係の具体例を望むかもしれないが、私はあえて例を挙げないことにした。 この決定を下した主な理由は、治療を必要とする事例を挙げた場合、その状況が議論された事例と似ていると感じる読者が、あたかも自分自身が「病気」であると定義づけられたかのように誤解してしまう恐れがあるからです。そのような診断を下せるのは臨床家だけなのです。その代わりに、

「トライアングレーション」という概念が極めて説得力のあるものであるため、読者の皆様がご自宅や職場、慈善活動や市民活動、あるいはスポーツ団体などで即座に具体例を思い浮かべ、ご自身の「トライアングレーション」体験こそが、この概念を理解するために必要なすべての事例となってくれることを願っています。

ご家族を人間関係の複雑なシステムとして捉え、前述の家族システムに関する知見を活用し、その知恵をご自身の家族に合わせて応用することで、ご家族による共同意思決定のプロセスが大幅に促進されるでしょう。これにより、ご家族のシステムが何で構成されているか、その中での関係性が実際にどのように機能しているか、そしてそれらの構成要素を通じて意思決定プロセスがどのように機能しているかを理解する助けとなるはずです。

---

1. ボーウェンの理論をさらに深く学びたい方には、彼の著書『Family Theory in Clinical Practice』と、彼の弟子であるエドウィン・

フリードマン著『A Failure of Nerve』などが挙げられます。あるいは、ワシントンD.C.のジョージタウンにあるジョージタウン・ファミリー・センターで学ぶことも、優れた学びの機会となるでしょう。

2. 私はボーウェンの研究の専門家ではないため、私の限られた知識でこれらの考えを十分に説明できていることを願っています。読者の皆様は、ご自身の状況を分析する際に私の解説に頼るのではなく、この分野の訓練を受けた専門家に指導を求めるべきです。

「同盟者、友人、その他」――人間関係を分類するシステム

心理学が私に家族を支援するための有用なツールを提供してくれた2つ目の分野は、意思決定に臨む際に、さまざまな人間関係を分類するシステムについて学んだことです。このプロセスでは、家族内の意思決定システムに入る際、あるいは別の家族や社会的システムとの意思決定プロセスに入る際に、誰が私たちの「味方」であり、誰が「友人」であり、誰が「その他」であるかを自問するよう求められます。

このプロセスにおいて「敵」とラベル付けされる存在がないことは、すぐにご理解いただけるでしょう。なぜでしょうか？ それは、家族の長い長い旅路において、今日敵のように見える人々が、明日には私たちの味方になっている可能性大だからです。親和性を持つ家族が家族内で意思決定を行う際、その決定が「7世代にわたって前向きなもの」となるためには、すべての個人と家族構成員の船が共に浮上しなければなりません。したがって、親和性を持つ家族の中に敵など存在し得ないのです。 対話や意見の相違はあり得ます。それは、あらゆる議論がテーブルの上に載ることを保証し、良い意思決定に役立つものです。しかし、「家族の敵」が存在すること――それは、親和性のある家族が成功を収めるためにはあり得ないことです。

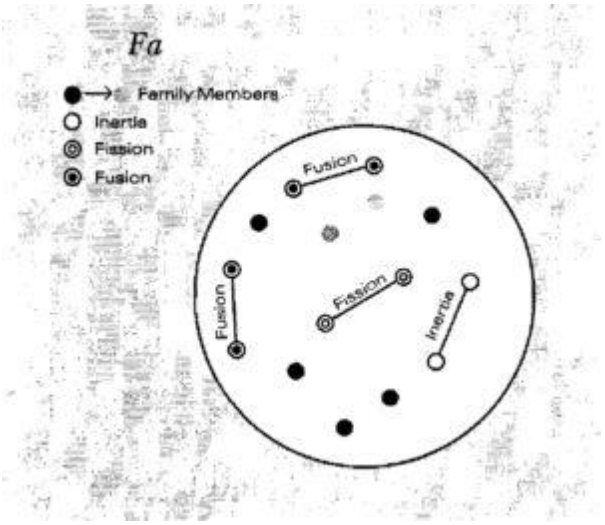
このシステムは、意思決定の際に提示されそうなさまざまな視点を把握する手助けをすることで、適切な意思決定プロセスに非常に役立つツールを提供します。これは、意思決定プロセスに参加するすべての人を定義するのに役立ちます。具体的には、私たちの立場に賛成しない可能性のある人々を「他者」、中立的な人々を「友人」、そして私たちの立場に同意する可能性が高い「同盟者」として分類するのです。 プロセスに関わるすべての参加者の見解を把握することで、私たちが求める結果を達成するために最も協力してくれる人々を見つけられるようになるはずです。また、私の経験上、このプロセスを通じて、自分たちが気づいていなかった「友人」が明らかになり、彼らが「同盟者」となることも頻繁にあります。同時に、将来「友人」になる可能性のある「他者」の視点も十分に理解することが求められます。 意思決定者一人ひとりの視点を深く考察することは、合意がどこで形成されそうかを判断する能力を高めるだけでなく、自分たちの主張や同盟者の主張が本当に家族全体にとって最善なのか、あるいは「友人」や、場合によっては「その他」の立場の人々がより優れた主張を持っているのではないか、と自問する助けにもなります。私の著書『Family Wealth』[3]で家族会議のルールについて論じた際にも述べたように、肯定的に耳を傾けること、非難や判断を恐れることなく自分の本音を語ること、そして結果に先入観を持たないことは、家族が意思決定を成功させるための極めて重要な基礎的なツールです。 「味方、友人、その他」というプロセスを用いて会議の準備を行うことは、良い決定がどこにあるかという感覚を研ぎ澄ますだけでなく、会議での意思決定の対話に参加する準備を整え、

これにより、家族の幸福と未来のために最善の決定を下すために、これら3つの会議テクニックを活用する能力を高めることができるのです。

家族システムの具体例

重要な意思決定に直面している家族を支援するために私が用いる3つ目のテクニックは、心理学、複雑系理論、そして「家族には『取引』ではなく『移行』がある」という私の見解を組み合わせたものです。

その仕組みは以下の通りです。私は、家族の「システム」を次のように図解します。



* 注

この家族とそのシステムの図を念頭に置き、私が関わる各家族のシステムに参入する際にこれを適用します。 最初のステップは、空の円から始め、家族一人ひとりの名前を意識に呼び起こし、その名前を書いた点を円の内側に配置することです。このようにして、円の中に存在する家族全員を徐々に意識の中に取り込んでいきます。次に、点と点とのつながりを想像し、

融合の原理がどの程度強く作用しているかを想像します。第三に、その家族が直面している問題の決定において、各家族メンバーが果たす役割を表す具体的な肩書きを、名前や関係性に当てはめます。例えば、信託に関する決定の場合、その決定によって影響を受ける受益者や受託者は、円の中に誰がいるのでしょうか？ [4] 第四に、外側の二つの円にいる誰かが意思決定プロセスに関与するかどうか、またその人物が誰とつながるかを検討します。第五に、家族がどのような過渡期にあるか、そして下すべき決定が、いかにして最も穏やかで進化的な方法でそれらの過渡期に統合されるかを検討します。

第六に、そして最後に、その決定によって最も影響を受ける家族メンバーをリストアップし、各人が決定の結果に対して抱くであろう3つまたは4つの目標のうち、その人にとってどの目標が最優先事項となる可能性が高いかを自問します。[5] 私は、その家族構成員が決定の結果から個人的に何を得たいと最も強く望んでいるのかを理解しようと試みることで、その人の心理に寄り添い、決定に対してどのような立場を取る可能性が高いかを把握しようと努めます。マクロな視点、すなわち家族システム全体の枠組みから始め、その関係性へと移り、次にその変化の過程を含め、最後にシステム内の構成員の願望までを網羅することで、私は、そのシステムがどのように機能すれば、

その特定の決定における家族の幸福。もちろん、この知見を家族の長老たちに伝え、

彼らがその手法を学び、自ら率いる

彼らが率いる家族にその手法を学び、適用できるよう支援できなければ、この知識は役に立ちません。私のプロセスが示す

家族にとっての最善の結果は、たいてい、長老たちが自ら導き出した直感的な答えと一致しているからです。だからこそ、彼らは長老なのです。

---

3. 「家族の資産：家族の手元に残す」

4. なお、受託者は、その動機が何であれ、常にサークル内の「親族関係にある者」であることにご留意ください。

5. 目標の例としては、エゴ的なもの、自尊心、個人的な財務目標、家族内での地位、家族外での地位などが挙げられます。

人間の発達を促進する心理学的システム

ここでは、心理学におけるシステムの問題から、個々の家族構成員の幸福への旅を加速させるために心理学が知恵を提供する問題へと話題を移します。まず、人間の生涯の発達段階という問いに心と精神を注いできた現代心理学の巨匠たちから始めましょう。 しかし、本題に入る前に、彼らの先駆者たち――ヒンドゥー教や仏教の賢者たち、そしてギリシャの哲学者たち、とりわけアリストテレス――に敬意を表しておきたい。アリストテレスの人生の段階に関する著作については、他の著作、特に私の著書『Family』[6]で詳述している。ここで彼らに言及するのは、読者の皆さんがこのセクションを読み進める中で、

個々の人間の心、体、精神の完全な発達に関する議論を徹底的に理解するためには、古代から現代に至るまでの東洋と西洋の思想から学ぶべきことが多くあることを、読者がこのセクションを読み進める中で思い出してくださることを願って、ここで彼らに言及する。私の研究に最も大きな影響を与えた現代の心理学者としては、カール・ユング、ジャン・ピアジェ、エリック・エリクソン、ダニエル・レビンソン、ジェフリー・ジャンセン・アーネット、アレクサンドラ・ロビンス、アビー・ウィルナー、ジェームズ・ホリス、アブラハム・マズロー、ヘレン・L・ビー、ジェームズ・ヒルマン、アラン・ジョーンズ、そしてジョン・オニールが挙げられる。 以下に、これら各著者の著作を列挙する。これらは、人間の心と精神の発達段階に関する彼らの卓越した洞察を知るために、ぜひ読んでいただきたいものである[7]

カール・ユング：*『回想・夢・省察』*、*『心理学と東洋』*、*『原型と集合的無意識』*

ジャン・ピアジェとバルベル・インヘルダー著*『子どもの心理学』*

エリック・エリクソンの*『児童期と社会』*、*『アイデンティティとライフサイクル』*、*および『ライフサイクルの完結』*。

ジェフリー・ジャンセン・アーネット著*『エマージング・アダルトフッド』*

アレクサンドラ・ロビンスとアビー・ウィルナー著*『クォーターライフ・クライシス』*ダニエル・レビンソン著*『男性の人生の季節』および『女性の人生の季節』*

ジェームズ・ホリス著*『ミドル・パッセージ――中年の苦悩から意味への旅』*および*『人生を創る――自分だけの道を見つける』*

アブラハム・マズローの*『存在の心理学へ』*

ヘレン・L・ビーの*『成人への旅』*

ジェームズ・ヒルマンの*『The Force of Character』*（これは人生の

人生の第三段階について論じた本である。ヒルマンが「顔のしわは、私たちの人格が形成されていく物語である」と表現した比喩は美しい。）

アラン・ジョーンズとジョン・オニール著『*男の恵みの季節*』

これらの著者の著作を一つひとつ詳細に解説しても読者にとって有益ではないと考えられるため、ここではアブラハム・マズローとエリック・エリクソンの著作についてのみ要約する。カール・ユングとジェームズ・ホリスの著作については、後述の別のセクションでそれぞれの特定の章を取り上げる。

---

6 「家族：世代間の契約」

7 身体の発達段階については、それが個人の心や精神の成長あるいは衰退を反映している場合を除き、生物学を学ぶ学生に委ねることにする。この後者の「衰退」の段階については、一部の著者が言及しており、ヒンドゥー教における人生の第四段階、すなわち「身体の消滅」を定義づけている。

アブラハム・マズロー

アブラハム・マズローは著書『存在の心理学へ』において、人間は自己実現に向けた進化の過程で様々な発達段階を経ると提唱している。さらにマズローは、人間は人生の各段階において異なる欲求を持ち、これらの欲求が最も基本的なものからより複雑なものへと上向きに推移するにつれて、欲求の階層を形成すると提唱している。以下はマズローの言葉である：[8]

『存在の心理学へ向けて』 – 199、200ページ 基本的欲求

その充足とは、物、所有物、金銭、衣服、自動車などを意味すると解釈されがちである。しかし、これらはそれ自体では基本的欲求を満たすものではない。身体的欲求が満たされた後の基本的欲求とは、(1) 保護、安全、安心、(2) 帰属感（家族、コミュニティ、氏族、グループ、友情、愛情、愛など）、

(3) 尊敬、評価、承認、尊厳、自尊心、そして (4) 自身の才能や能力を最大限に発揮し、自己実現するための自由である。 これは一見単純なように思えるが、世界中のどこを見ても、その意味を真に理解できている人はほとんどいないようだ。最も低次で差し迫ったニーズは、例えば食料、住居、衣服といった物質的なものであるため、人々はこれを主に物質主義的な動機付けの心理学として一般化しがちであり、それと同様に「基本的」である、より高次の非物質的なニーズも存在することを忘れてしまっているのだ。

同書 172ページ

基本的な動機付けは、より高いニーズとより低いニーズ、より強いものとより弱いもの、より不可欠なものとより省略可能なものとして互いに関連し合う、既成の価値観の階層を提供していることを忘れてはならない。

これらのニーズは二分法的にではなく、統合された階層構造として配置されており、つまり、互いに支え合っている。例えば、特別な才能の実現というより高いニーズは、たとえ非活動状態にあっても消えることのない、例えば安全のニーズの継続的な充足の上に成り立っている。（ここで言う「非活動状態」とは、腹いっぱい食べた後の空腹の状態を指す。）

同書 17ページ 3

したがって、こうした健全な退行的な価値観の選択は、いわゆる「高次の価値観」と同様に、「正常」で、自然で、健全で、本能的であると見なされなければならない。また、それらが互いに弁証法的あるいは動的な関係にあることも明らかである（あるいは、私が好んで言うように、それらは二分法的なものではなく、階層的に統合されている）。 そして最後に、大多数の人々にとって、ほとんどの場合、低次の欲求や価値観が、高次の欲求や価値観よりも優先されるという、明白で記述的な事実、すなわちそれらが強い退行的な引力を及ぼしているという事実に対処しなければならない。高次の価値観が一貫してより頻繁に選択され、好まれるのは、最も健康的で、最も成熟し、最も進化した個人に限られる（そしてそれも、良好あるいはかなり良好な生活環境下でのみである）。 そして、これが真実である主な理由は、満たされた低次のニーズが確固たる基盤となっているからだろう。これらのニーズは、満たされたことで休眠状態となり不活性になっているため、後退への引力を及ぼさないのだ（そして、このニーズ充足という仮定が、かなり良好な世界を前提としていることも、同様に明白な事実である）。

これを古風な言い方で要約すれば、人間のより高い本性は、人間のより低い本性の上に成り立っており、それを土台として必要とし、この土台がなければ崩壊してしまう、ということになる。つまり、人類の大多数にとって、満たされたより低い本性を土台としない限り、人間のより高い本性は考えられないのである。このより高い本性を育む最善の方法は、まずより低い本性を満たし、充足させることである。さらに、人間のより高い本性は現在および過去の、良好あるいはかなり良好な環境の存在にも支えられている。

マズローはさらに、人間が自身の発達の最高段階である「自己実現」へと成長する本質について説明している。彼はこのプロセスを

「なること（Becoming）」から「あること（Being）」への移行と定義し、自己実現の段階がどのような特徴を持つかを説明している。

『自己実現：成長』同書155ページ

私は別の場所で、健全な成長あるいは自己実現的傾向という概念へと私たちを導くあらゆる証拠に関する概説を発表している　これは、ある意味で演繹的な証拠であり、、そのような概念を仮定しなければ、人間の行動の多くは意味をなさないことを指摘する点で、演繹的な証拠である。これは、他の多くの観測データを理解するために存在せざるを得なかった、それまで見過ごされていた惑星の発見につながったのと同じ科学的原理に基づくものである。

また、この見解を裏付ける直接的な臨床的・人格学的証拠に加え、増え続けるテストデータも存在する……。今や、人間の中に、一般的には「自己実現」あるいは「心理的健康」と要約され、具体的には自己実現の各サブ側面、すなわち すなわち、人間は、人格の統一、自発的な表現、完全な個性とアイデンティティ、盲目になるのではなく真実を見ること、創造的であること、善良であること、その他多くのものへと向かう内的な衝動を内に秘めているのである。 つまり、人間はその構造上、ますます充実した存在へと向かおうとするものであり、これは、大多数の人々が「善き価値観」と呼ぶもの、すなわち平静、親切、勇気、誠実さ、愛、無私、そして善性へと向かっていくことを意味する。

同書、VIページ

私が用いてきた「自己実現」という用語の方が、はるかに適切である。 この用語は「完全な人間性」、すなわち人間の生物学的基盤に基づく本性の発達を強調しており、したがって（経験的に見て）特定の時代や場所ではなく、人類全体にとって規範的なものであり、つまり文化的相対性が低い。これは、「健康」や「病気」といった用語がしばしばそうであるように、歴史的に恣意的で文化的に局所的な価値観モデルに従うのではなく、生物学的宿命に合致している。また、経験的な内容と操作的な意味も備えている。しかし、文学的な観点から見て不格好であることに加え、この用語には予期せぬ欠点があることが判明している。すなわち、a) 利他主義ではなく利己主義を暗示しているように見えること、b) 義務や人生の課題への献身という側面を軽視していること、c) 他者や社会との絆、そして個人の充実が「善い」ものに依存していることを無視していること、といった点である。

「社会」、d) 人間以外の現実が持つ要求的性質、およびその本質的な魅力や興味を軽視すること、e) 自我の欠如や自己超越を軽視すること、そして f) 受動性や受容性よりも、暗に能動性を強調すること。これは、自己実現を果たしている人々が利他的であり、献身的であり、自己超越的であり、社会的であるといった経験的事実を、私が慎重に記述しようとしたにもかかわらず、結果としてそうなってしまったのである。

同書、210ページ

36. 自己実現とは、あらゆる人間的な問題を超越することを意味するものではない。葛藤、不安、欲求不満、悲しみ、傷つき、罪悪感などは、健全な人間にも見られるものである。一般的に、成熟が進むにつれて、神経症的な偽の問題から、特定の種類の世界に生きる人間（たとえ最良の状態にあっても）の本質に内在する、現実的で

避けがたい実存的な問題へと向かう。これは、特定の世界に生きる人間の本質に内在するものである（たとえその人が最高の状態にあっても）。たとえその人が神経症的ではないとしても、（望ましくも必要でもない）神経症的な罪悪感ではなく、現実的で望ましくかつ必要な罪悪感、あるいは（フロイトの超自我ではなく）内発的な良心によって悩まされることがある。 たとえ「生成」の問題を超越したとしても、「存在」の問題は残る。悩まされるべき時に悩まないことは、病気の兆候となり得る。時には、自己満足に浸っている人々を、恐怖によって「正気に戻す」必要があることもある。

同書、157ページ

健康な人間の客観的に記述・測定可能な特徴には、次のようなものがある——

1. 現実に対するより明瞭で効率的な知覚。

2. 経験に対するより開かれた姿勢。

3. 人格の統合性、全体性、統一性の向上。4. 自発性、表現力の向上；完全な機能；

生き生きとした活力。

5. 真の自己；確固たるアイデンティティ；自律性、独自性。

6. 客観性の増大、距離感の保持、自己の超越。

7. 創造性の回復。

8. 具体性と抽象性を融合させる能力。

9. 民主的な性格構造。

10. 愛する能力など。同書、

157ページ

さらに、自己実現、あるいはそれに向けた健全な成長に対する主観的な確認や強化もある。これらは、

生きる喜び、幸福感や陶酔感、安らぎ、喜び、平静、責任感、そしてストレスや不安、問題に対処できる自身の能力への自信といった感情である。 自己裏切り、固定化、退行、そして成長ではなく恐怖によって生きるという主観的な兆候には、不安、絶望、退屈、楽しみを感じられないこと、内発的な罪悪感、内発的な羞恥心、目的の欠如、空虚感、アイデンティティの欠如などの感情がある。

10. 同上、194ページ

この内面の本質は、現時点で私たちが把握している限りでは、決して

「悪」であるわけではなく、むしろ私たちの文化における大人が「善」と呼ぶもの、あるいは中立的なものである。これを最も正確に表現するならば、「善悪に先立つ」ものであると言える。乳児や子どもの内面の本質について語る場合、これについてはほとんど疑いの余地がない。 しかし、大人の中に依然として存在する「幼児」について語る場合、この主張はより複雑になる。この結論は、人間の本性に関わるあらゆる真実を明らかにし、掘り起こす技法——心理療法、客観的科学、主観的科学、教育、芸術——によって裏付けられている。例えば、長期的には、掘り起こし療法は悪意、恐怖、貪欲などを減らし、愛、勇気、創造性、親切心、

利他主義などを増大させ、その結果、後者が前者よりも「より深い」、より自然で、本質的に人間らしいものであるという結論に至らせる。すなわち、私たちが「悪い」と呼ぶ行動は解明によって軽減または除去され、一方で「良い」と呼ぶ行動は解明によって強化され、育まれるのである。

同書、204ページ

25. 成長には、報酬や喜びだけでなく、多くの本質的な苦痛も伴い、それは今後も常にそうあり続けるだろう。一歩前進することは、未知の世界への一歩であり、おそらく危険を伴う。それはまた、慣れ親しんだ、良くて満足のいく何かを諦めることを意味する。それはしばしば、別れや離別、さらには再生に先立つ一種の死を意味し、その結果として郷愁、恐怖、孤独、そして悲嘆が伴う。 また、それはしばしば、より単純で、楽で、努力を要しない生活を捨て、その代わりに、より要求が厳しく、より責任が重く、より困難な生活を受け入れることを意味する。前進する成長は、こうした喪失を乗り越えてこそ成り立つものであり、したがって、個人には勇気、意志、選択、そして強さが求められるだけでなく、特に子どもにとっては、環境からの保護、許容、そして励ましが必要となる。

私たちがどのようにして最高の自己を実現し、マズローが説く特質を持って人生を生きることができるかを理解することは、真に生き生きと目覚め、初心の心を持って生きることである。私たちの親族の全員が、人間的・知的資質をこのレベルまで高めている姿を想像することは、超越した心、体、そして精神を描いた美しい絵画のようなものである。私たちのそれぞれの家族の中にいる一人ひとりが、そのような状態にあることを願おう。

---

8 ここに引用されたすべての引用文は、アブラハム・マズロー著『Toward A Psychology of Being』（第2版、N.Y.、Van Nostrand Reinhard、1982年）からのものです。

エリック・エリクソン

エリック・エリクソンは、著書『児童期と社会』の第7章において、私たち人間には8つの明確な人生の段階があると提唱している。 エリクソンはこれらを「人間の八つの年齢」と呼んでいる。彼は、私たちの人生の旅における各発達レベル、すなわち各段階において、その段階を特徴づける二つの対立する発達的選択肢――一つは肯定的、もう一つは否定的――が存在すると提唱している。また、自分が置かれている人生の段階における肯定的な側面を発達させ、統合し、それを次の段階へと持ち越すことができれば、生涯を通じて自らの能力を最大限に発揮できるようになることも示している。 残念ながら、もし（その発達段階において生じる否定的な危機などを通じて）否定的な側面に打ち負かされ、その否定的な側面を次の段階へと持ち越してしまうと、人生の今後の段階における成長能力に深刻な悪影響を及ぼすことになる。新生児から始まり、80代以降に至るまでの8つの段階とその2つの側面は、以下の通りである。

1. 基本的信頼 対 基本的不信 [9]
2. 自律性 対 羞恥心と疑念 [10]
3. 自発性 対 罪悪感 [11]
4. 勤勉性 対 劣等感 [12]
5. アイデンティティ対役割の混乱 [13]
6. 親密性対孤立 [14]
7. 生み出す力対停滞 [15]
8. 自我の統合対絶望 [16]

エリクソンは、自己の評価、そしてその自己が

人間の発達過程における各段階、すなわち「年齢」ごとに、社会の中でどのように自己が表現されるかを評価するための、心理学的かつ文化人類学的な発達モデルを提示している。エリクソンは、私たちの心と精神が生涯を通じて進化していく中で、何を期待すべきかを定義しようとする進化論的なツールとして、心理学を私たちに提示している。第7の段階において、彼は

「ジェネラティビティ（創造性）」という概念を展開している。この段階は、利他主義がその最も顕著な特徴の一つであるマズローの自己実現の最高段階と密接に関連しているように思われる。私が様々な著作、特に『家族』で述べてきたように、私たち人間には利他主義の遺伝子があり、したがって、単に利己的な遺伝的存在ではないと私は信じている。マズローとエリクソンは、人間の心理的発達に関する研究において、明らかに意見が一致しており、人類の中で最も個性を確立し、自己実現を果たした人々の研究から、この資質が彼らの決定的な特徴として表れていることを示している。あらゆる宗教的伝統が、信徒が目指しうる最高の精神的発達を定義する際に、ほぼ同じ結論に達していることは、私にとって驚くべきことではない。 私にとって、これは仏教における菩薩によって象徴されています。菩薩は、完全に進化した人間として、すべての衆生の苦しみを終わらせようと努める中で、純粋な慈悲を体現しています。過去の偉大な精神的指導者たちと、現代人の発達について論じる現代の偉大な思想家たちが、私たちホモ・サピエンスが人間としての最高段階をどのように表現するかについて一致していることは、私にとって喜ばしい考えです。[1

7] 彼らは、私たちが利他主義者となることを求め、愛とその表現である喜びを通じて他者を助けたいという願望を表現し、そうすることで自らも幸福を手にすることができるという点で一致している。

中年の危機――完全な自己実現と生み出す力（ジェネラティビティ）がもたらす至福から、ここで一旦目を離し、中年の危機という問題、その現実性、そして人生の後半における真の人間の幸福に向けた発展の可能性について考えてみよう。

個人的な話――『Family Wealth』および『Family』において、私は自身の中年の危機について論じ、それが人生の第二段階において他者により良く奉仕するための有用性にどのように寄与したか、また心・体・精神のウェルビーイングにどのように貢献したかを詳述した。『家族』の自伝的部分では、ダンテが中年の危機を「中年に差し掛かり、行く当てもない暗い森の中で自分自身を見出すこと」と描写した一節から書き始めた。それは、私が中年の危機の始まりをどのように体験したかを最も的確に表現していたからである。 前述したように、ダンテの偉大な詩は、彼の精神が「暗い森」に象徴される完全な絶望の深淵から、古い自己を浄化して精神の発達における次の段階に必要な新たな知識を受け入れるための「空虚」を築き上げ、最終的に新たに目覚めた自己を達成する至福に至るまでの旅路を描いている。これこそが、中年の危機に伴う苦難と課題であり、またその約束でもある。 先に述べたマズローによる成長過程の記述は、このプロセスとその結果を現代的に解明したものであると私は考えている。彼とダンテは、人生の転換期を乗り越えるための儀式の道筋と目的に対応するプロセスを描いているのだと私は信じている。これこそが、あらゆる儀式がたどる道である。ある人生の段階からの心理的な脱却であり、それが完了したとき、私たちは次の人生段階に必要な新たな情報を受け入れ、取り入れるための扉が開かれるのである。

その中で人生を存分に生き抜き、その経験を完全に自分の中に統合した上で、人生の流れへと戻り、その経験を活かして人生の次の段階を歩んでいくこと。

おそらく誰も、ミッドライフ・クライシスという「深い浄化」を心待ちにしているわけではないだろうが、これらの偉大な人物やその他多くの人々の研究から明らかなように、私たちが最大限に成長するためには、自らの幸福のためにその課題を受け入れなければならないのである。

---

9 ページ 147-251

10ページ 251-254

11 ページ 251-254

12 ページ 258-261

13 ページ 261-163

14 ページ 263-266

15 ページ 266-268

16 ページ 268-269

17 エリクソンの第7段階が、自分たちの生活やより広い社会においてどのように現れるかに関心を持つ賢明な長老たちのために、エド・デ・セント・オービン、ダン・P・マクアダムス、キム・テチョンが編集した『*The Generative Society*』という本に、このテーマに関する素晴らしいエッセイ集が収録されている。私たち全員が、エリクソンの人生の第7段階の特徴に基づいた世界で生きることができたら、どれほど素晴らしいことだろうか！

カール・ユング

ここで、カール・ユングと、その弟子であるゲイル・シーヘイという二人の著者の著作に目を向けたい。私は、ユングの著作が人間の発達過程を記述した現代における最も深い試みであり、シーヘイによるユングの著作の解説は、それを一般の読者にも驚くほど分かりやすい形で伝える手段であると信じている[18]。

まずはカール・ユングから始めよう[19]。ユングは、中年期において、男性は自身の影となる女性的な側面、すなわち「アニマ」と向き合うことを求められ、女性は自身の影となる男性的な側面、すなわち「アニムス」と向き合うことを求められると説いている。ユングは、これらが自己の発達にとって最も重要な可能性に満ちた瞬間であると示唆している。もし、こうした対峙が通常もたらす危機を前向きに受け入れ、

影の側面を統合する作業が適切に行われれば、人生の後半において、私たちは自己の最高の発達と、そこから生まれる高次の幸福を達成することができるだろう。 人間の自己の二面性、すなわち男性的側面と女性的側面、そしてそれらの統合の必要性について、この現代的な解説を通じて、私たちは「完全な人間」となるための道を見出すのです。私自身の人生経験に基づき、これが私たちが行う最も重要な作業であるという点において、私はユングの見解に全面的に同意します。 もし、40代後半に訪れる危機を押し殺してこの課題を回避してしまうなら、私たちは「自分とは何者か」という最も深い学びと、その気づきから得られる幸福を見逃してしまうことになる。本書を通じて繰り返し述べてきたように、ソクラテスの「汝自身を知れ」という訓戒は、私たちの個人的な旅路における課題であり、この取り組みを通じてこそ、私たちは自分自身を完全に発見できる可能性が最も高くなるのだ。

危機が訪れた時にそれを受け入れ、自己と精神の奥深くへと入り込んでその賜物を見出し、そして得た新たな自己理解を携えて戻ってくる——これこそが、精神の発達を描いた数多くの有名な神話的旅路が私たちに語り継いでいる古典的な物語である。ユングは、東洋と西洋の両方の神話、そして無意識の自己への旅に関する研究から深い影響を受けた。彼は、これらの神話が、私たちの最も深い幸福のために最も必要とされる「全体性」への道を正確に物語っていることを見抜いていた。 自己を完全に発見するための内なる旅は、すべての人間にとっての課題である。その旅に最適な瞬間は、私たちが中年の時期に、行き場のない暗い森の中に身を置いているとき訪れる。

中年の危機に端を発するカール・ユングの研究のもう一つの側面は、男性と女性の精神が、その最高の使命として何を達成すべきかについて説く、仏教やユダヤ教の精神的教えと結びついている。

仏教とユダヤ教は、男性の精神の完成は純粋な慈悲となることにあり、女性の精神の完成は純粋な知恵となることにあると説いている。

西洋の読者なら、これはどこか非常に奇妙に感じられるだろう。なぜなら、西洋の一般的な見解では、男性は「賢明」であり、女性は「慈悲深い」と定義されているからだ。確かに、西洋が「発達」の完全な達成をどのように定義してきたかという点において、この見解は正しい。しかし、今お分かりのように、世界の知恵の伝統の多くはこれに異を唱えている。

では、ユングはこの議論にどのように関わってくるのでしょうか。ユングは、自身の女性的な側面を完全に統合した男性は、人生の第二段階において、まず自分自身のために、そして次に自分と関係を持つすべての人々のために、慈悲を学び、統合しようとすると提唱しています。

、そして次に、自分と関係を持つすべての人々への思いやりを学び、統合しようとします。一方、自身の男性的な側面を完全に統合した女性は、人生の第二段階において、天職を求め、仕事を通じて自分とは何者であるかを学び、平和のための戦士となることを目指します。その過程で、彼女は自分のすべての側面を完全に統合し、知恵そのものとなるのです。

ユングは、ギリシャ人がアテナを知恵の女神として描いていたこと、ユダヤ人が女性的なエネルギーをソフィア（知恵）として描いていたこと、そして仏教徒がタンカにおいて、女性的なエネルギーを知恵、男性的なエネルギーを思いやりとして描き、この二つのエネルギーが融合して全体を形成する様子を示していたことを知っていた。

おそらく、諸知恵の伝統が私たちの本性の最高の発達をいかに理解していたかを観察し、それらの見解を自身の研究結果と結びつけることで、ユングは、男性の「仕事」の第2段階の定義が「慈悲へと導く人間関係」にあり、女性のそれは「知恵へと導く天職としての仕事」にあると理解するに至ったのでしょう。これらは、人生の初期段階における両者の旅路の対極に位置するものです。

この「省察」に登場する他の多くの考えと同様、これは人間のあり方に関する古代からの思考であり、私たち人間がどのように振る舞い、最高の自己に到達したときにどのような存在になるかについて、何千年にもわたって思慮深い人々が観察してきた事実に基づいています。

私個人としては、人生のこの段階における自分の仕事は、完全に思いやりのある人間になることを学ぶことだという考えこそが、まさに私の心が切望していることだと感じています。また、私が最も尊敬する女性たち（特にジャクリーン）は、真の知恵を備えた人々であることも実感しています。

---

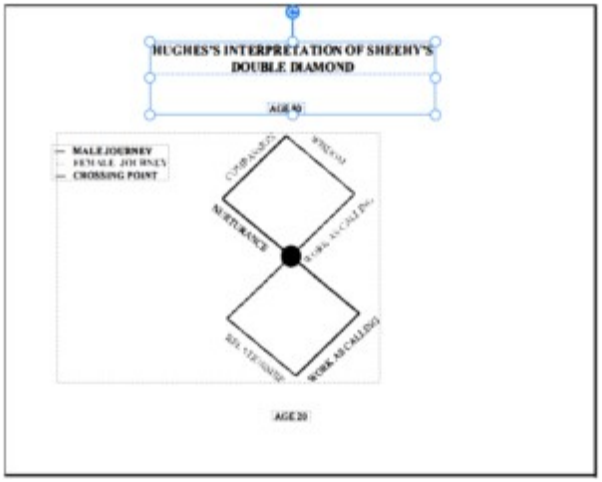
18 ゲイル・シーヒー『パッセージ』および『ニュー・パッセージ』

19 著者注：現代の心理学のほぼすべては、ユングの研究に基づいています。ユングは、フロイトと決別するまでは、ジークムント・フロイトの最も優れた弟子でした。その後、ユングはフロイトの研究の多くを反証し、心と無意識の働きに関する独自の哲学と実践を展開しました。私が挙げたユングの著書は、彼の研究をより深く知りたい人にとって、その入り口となるものです。

ゲイル・シーヒー

ユングの弟子であるゲイル・シーヒーは、著書『パッセージ』および『ニュー・パッセージ』において、私たちの大半が認識し、特徴づけている通り、人生の各段階と、それらが投げかける問いを、読者に案内してくれます。 各段階の本質を定義するために多くの人々に対して行った徹底的なインタビューをシーヒーが凝縮した内容は、私たち一人ひとりが各段階と、それを特徴づける行動を、非常に穏やかで親しみやすい方法で理解する助けとなります。 人生のさまざまな段階において、なぜ自分の感じ方や行動が異なって見えるのかについて、学術的ではない理解を求めている読者にとって、シーヒーの著書は、10代であろうと80代であろうと、そうした感情や私たちの行動の理由を説明する、発達心理学的・人類学的な真実への入り口となるでしょう。

中年の危機についての議論の中で、シーヒーの著作にある一つの側面を取り上げたいと思います。『パッセージズ』の中で、シーヒーは極めて参考になる図を示しています。



下部のダイヤモンド図を見ると、男性の旅路は「天職としての仕事」の旅路として、女性の旅路は「人間関係」の旅路として定義されていることに気づくでしょう。 また、下の菱形の上部で、男性と女性の線が交差し、その後、私が「上の菱形」と定義する領域へと流れ込んでいくことにもお気づきになるでしょう。ただし、この段階では、男性の旅は「人間関係」の旅となり、女性の旅は「天職としての仕事」の旅となっています。この美しい図を通じて、シーヒーは、人生の第一段階と第二段階における男性の旅、およびそれに対応する女性の旅について、ユングが示した素晴らしい洞察を具現化しています。 最初の交差点は、男性と女性がそれぞれ自身の女性的・男性的なシャドウサイドの統合へと向かい、その後の旅路を進む中で、中年の危機が生じる地点です。また、もし両者が80代に達し、私が「上部のダイヤモンド」と見なす頂点で再び出会うとしたら——そこが第二の交差点となるでしょう——、完全性へと至る人生の旅路について、一方は思いやりを、もう一方は知恵を携えて、どのような物語を語り合うことになるだろうか、と私は思います。

ユングとシーヒーが述べていることを示す例を挙げよう。ロバート・フィッシャーによる素晴らしい小著『*さびた鎧の騎士*』には、

、最初は輝く鎧を身にまとい、愛する女性から憧れの眼差しを向けられていた男性が描かれています。その男性は、中年期になると、彼女が「関係性」の側面から「仕事」という男性的な側面の統合へと移行するにつれて、彼女の目には鎧が錆びて見えるようになります。そして最終的に、二人がそれぞれの内面的な成長を経て再び結びついたとき、彼の鎧は再び輝きを取り戻すのです。 多くの読者の皆さんが、「わあ、私も人生で最愛の人とこの旅をしてきた。彼や彼女からこの本を贈られていたらよかったのに」とおっしゃっていることでしょう。

私の人生第二段階における愛は、彼女が自身の内面の旅を成し遂げたことから生まれる愛と慈しみをもって、この本を私に与えてくれたという点で、計り知れない恵みでした。だからといって、私が「ハニー・ドゥ」リストを渡され、それをやり遂げられずに、錆びついた鎧について注意を受けることがないわけではありません。しかし、私たちはそれを笑い飛ばすことができ、それこそがすべてを変えるのです。 シーヒーの「ダブル・ダイヤモンド」が、私たちの心理的な旅路がどのような性質を持ち、それが私たちの魂をどこへと導いているのかについて、ユングが私たちに与えてくれた贈り物への入り口を、皆さん一人ひとりに提供してくれることを願っています。皆さんがこの本によって目覚めを得られることを願っています。

ロバート・ジョンソン

男性と女性のユング的旅路に対する私たちの認識をさらに深める助けとして、ロバート・ジョンソンによる一連の素晴らしい小冊子があります。彼はおそらくユングの弟子の中で最も偉大な人物であり、優れた心理療法家かつ人道主義者です。私はこれらの本を何冊も手元に置いており、旅路の最初の段階にある若い男女の友人たちに贈っています。それらのタイトルは、『*彼（He）*』、*『理解（Understanding）』*です。

『男性心理学』、「変容――男性意識の3つのレベルを理解する」、「彼女――女性心理学を理解する」、「私たち――ロマンチックな愛の心理学を理解する」、「内なる作業――夢と能動的想像力を用いた自己成長」、「自らの影を受け入れる――プシュケのダークサイドを理解する」。

エーリッヒ・ノイマン

このテーマに関するもう一冊の参考書として、エーリッヒ・ノイマンの*『アモールとプシュケ――女性性の精神発達』*がある。

スーザン・ピバー

最後に、新しいカップルが結ばれる年齢に関わらず、スーザン・パイバーの*『The Hard Questions』*は、私がすべての新しいカップルに贈っている本です。この本は、私たちが互いに尋ねたいと願っていたすべての質問を、提示する形で提供してくれます。また、パイバーは素晴らしい

洞察を示している。すなわち、素晴らしい関係は意見の一致に基づいているのではなく、むしろ、私たちの心の奥底で真実だと信じていることに対する互いの哲学を理解し、その後、二人にふさわしい最も重要な問いに対する良い答えを共に模索していくことにあるのだ。この本をくれた親愛なる友人に感謝したい。この本は、ジャッキーと私、そして多くの他の人々を助けてくれた。

『女性の人生の段階：現代性』

ユングやジョンソンが記述し、シーヒーが例示した男女の心理的旅路というテーマに引き続き、現代生活において大きな負担となっている問題について触れたいと思います。それは、人生の成長過程の初期段階にある若い女性たちが陥ってしまう罠の問題です。 それは、この人生の段階において、キャリアと、人生のパートナーおよび母親としての役割との間で、彼女たちの内面に生じる葛藤という罠です。私が支援している家族の中で、この罠がどれほどの苦しみを生み出しているかをお伝えするために、まずあるエピソードから始めさせてください。私が初めてある家族と会う際、各家族メンバーに、他の家族と共有するための「履歴書」を書いてもらうように頼みます。 この演習を行うことを事前に家族には伝えていないため、彼らの回答はリハーサルされたものではなく、自然発的なものになります。私は彼らに、「正解などなく、ただ自分なりの答えがあるだけだ」と説明し、ただ一つお願いするのは、答えを考える際にできるだけ深く、幅広く考えてほしいということだけです。ちなみに、男性は半ページほどしか書かないのに対し、女性は数ページにもわたって書き連ねます。

おそらく、ジョン・グレイ、デボラ・タネン、ハーヴィル・ヘンドリックスの指摘には一理あるのかもしれません。質問は以下の通りです：

(a) 14歳か15歳の頃、あなたの大きな夢は何でしたか？

(b) あなたが心から情熱を注いでいることは何ですか？

(c) 家族には知られていない、友人だけが知っているあなたのことは何ですか？

(d) もし家族から一つだけプレゼントをもらえるとしたら、何がいいですか？

これらの質問はどれも、ほとんどの

家族同士が互いに知らないような情報を引き出しますが、特に「夢」に関する質問は、私がここで論じている「落とし穴」に直結するものです。25歳から45歳の間に若い娘を持つすべての家庭において

25歳から45歳の親であり、必ずしもそうとは限りませんが、多くの場合キャリアを持っている若い女性がいる家庭では、私はその中の少なくとも一人が何を求めるかを書き留めます。その答えを裏返しにして自分の目の前に置きます。 毎回、必ず少なくとも一人の若い女性が私の予測を裏付ける。彼女は、「一日だけ、一人で、静かに過ごしたい」と頼むのだ。そのような要求に表れる苦しみは、現実のものであり、深い。恐ろしいことに、私たちの若い女性たちの人生の道は、混沌と狂乱の状態にあり、彼女たちを特徴づける喧騒と絶え間ない動きの中に、心理的に溺れかけているのだ。

どうしてこうなったのだろうか？20世紀後半の女性革命は、それまで閉ざされていた多くの新たなキャリアの機会を女性に開き、教育やキャリアを追求するための健全な環境を育むことで、西洋の女性たちを素晴らしい形で解放した。 実際、教育を追求する女性の割合に生じたこうした変化は、21世紀において社会革命をもたらすだろうと私は信じている。今世紀、女性の功績が、あらゆる職業や人間活動の分野において、彼女たちをトップレベルへと導いていくからだ。 こうした歴史のすべては称賛に値する。しかし、ハイゼンベルクの「予期せぬ結果」の理論と同様に、教育やキャリアの追求には、ジョンソンとノイマンが解明したユングの観察――すなわち、女性の人生の第一段階における旅は「人間関係の旅」である――との予期せぬ対立が伴っていた。ここに、若い女性たちにとっての落とし穴がある。 一方では、女性革命が彼女たちに「仕事」を天職として求める一方で、彼女たちの精神は人間関係を求めます。残念ながら、

「仕事」を通じて地位を築くことについて最も熱心に声を上げている人々は、ユングやその弟子たちの研究をしていないか、あるいは研究したとしても、あえて彼を無視しているように見える。その結果、今や若い女性たちはこの罠による苦しみに直面している。彼女たちはその要求によって精神的に燃え尽き、私の娘エレンを含め、彼女たちが私に語るように、「時間がない、何をする時間もない」あるいは「自分のための時間は全くない！」と、あまりにも頻繁に嘆いているのだ。 どうすれば助けられるだろうか？ 何もしなければ、これらの若い女性たちの自己認識を危険にさらし、それに伴う人間的・知的な自己の衰退を招いてしまうからだ。彼女たちは助けを求めて叫んでいる。助けとなる第一歩として、この罠は単に「時間と動作の研究」で解決できる問題ではなく、むしろユングやその弟子たちの著作に対する私たちの認識不足から生じている深い心理的傷であることを認めることだと提案したい。

。ここで急いで申し上げておきたいのは、私が「女性は希望するレベルまで教育を追求すべきではない」とか、「『仕事』という天職よりもパートナーシップや子育てを選ぶべきだ」という論理的な結論へと皆さんを導こうとしているわけではないということです。 決してそうではありません！！むしろ、若い女性たちの成長の旅をより豊かなものにするために、すべての家族に対し、ユングの観察を理解し、若い女性たちが、ユングが示唆した「女性の人生の第一段階の旅」とは何かを確実に理解できるようにしてほしいとお願いしているのです。

若い女性がこの深い知恵を認識できないままになることは悲劇です。なぜなら、そうすることで、彼女がなぜそのような感情を抱くのかを測るための基本的な土台を失ってしまうからです。この情報を得ることで、彼女は人生の第一段階における選択について、より深い理解に基づいた決断を下せるようになり、その結果、より質の高い人生につながる選択ができるようになるでしょう。また、ユングの観察は、

、人生の第二段階における課題に向き合う際にも役立つだろう。「天職」としての「仕事」は、女性の人生の第二段階の一部となる可能性が高いことから、彼女はその人生の段階におけるキャリアを、第一段階よりも発達的に自分に合っているものとして期待することができる。 社会の上位経済階層に属する女性の平均寿命が約90歳であることを考えると、これは女性にとって検討すべき点となるでしょう。繰り返しになりますが、私は、いかなる女性も、あるいは男性も、人生の旅路として何をすべきかについて、一切の示唆を行うつもりはありません。 ただ、ユングが私たちに与えてくれた、私たちの精神がどのように発達するか、そして男女それぞれの成長の道のりに関する知見が、家族が若い女性たちを導く際に活用できる概念となり、彼女たちの人生においてその罠が仕掛けられることなく、そこから生まれる幸福を享受できるようになることを願っているだけだ。男性の人間関係における道のり

さて、男性の旅路というテーマに、穏やかに話を戻しましょう。子供たちがジャッキーと私に、新しい孫が生まれることを知らせる際に使う新しい表現、「私たち」が妊娠している、という言い方に、私は依然として戸惑いを覚えています。はい、この表現が生物学的に誤りであるとして非難する私が、時代遅れであることは自覚しています。しかし、「妊娠している」という状態が、そのカップルにとって心理的により充実感をもたらす可能性が高いことは理解しています。

。しかし、もしユングの説が正しければ——すなわち、人生の第一段階における男性の旅路は「仕事」に関するものであり、それが女性の関係性の旅路と並行するものであるとすれば——、男性はせいぜいこの表現に戸惑うに違いないと推測せざるを得ない。とはいえ、18世紀から

20世紀へと苦闘してたどり着いた者であり、また子育てを終えた者として、私は21世紀のこの考え方の部分については、理解する必要はないと自覚している。

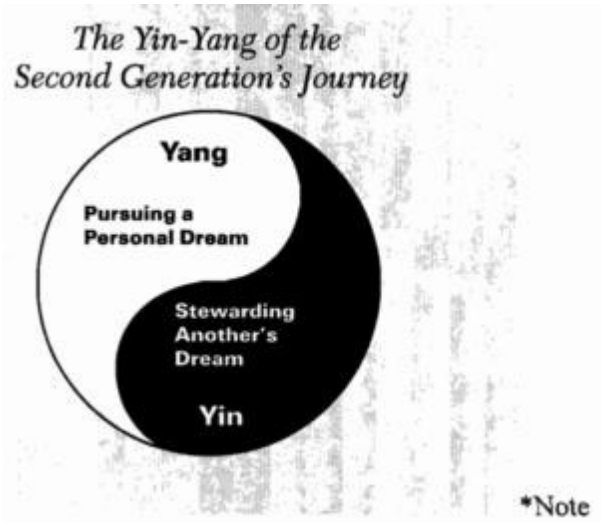
発達に関する第二世代の課題

さて、ここでは重要な心理学的課題、すなわち経済的に裕福な家庭の「第二世代」のメンバーの精神状態や心理について触れてみたいと思います。こうした家庭の「第一世代」や「第三世代」については多くの著作がありますが、意外にも「第二世代」についてはほとんど語られていません。その理由は、第一世代の創造性や発見に満ちた刺激的な人生が、『フォーブス』や『フォーチュン』誌の記事となり、しばしば伝記として取り上げられるからではないかと推測します。一方、第三世代については、家族が衰退し、やがて歴史の彼方へと消え去っていく過程で生じる機能不全を扱った書籍が数多く出版されています。では、第二世代に関する本はどこにあるのだろうか？もし存在するとしても、私はまだ見つけられていない。確かに、ジョン・D・ロックフェラー・シニアを描いた『タイタン』のような本には、その息子であるジョン・D・ロックフェラー・ジュニアについて多くのことが記されており、ヘンリー・フォードに関する本には、その息子エドセルについての記述がある。しかし、ある家系の第二世代の歩みや精神構造を描こうとする本——いいえ、そのような本は存在しない。 私にとって、これは深く憂慮すべき現実だ。なぜなら、一族の長期的な成功にとって最も重要なのは、まさにその二代目であると信じているからだ。一族が第五世代、さらにはそれ以降へと受け継がれる共同意思決定のシステムを構築できるかどうかは、この世代の活躍にかかっている。背後から支えるリーダーたちが最初に

発見され、育成されるのです。その後のあらゆる世代で再現可能な家族システムとそのガバナンスを構築しなければならないのも、この世代であり、そうすることで、いかなる世代も、心理的に「第三世代」となることを永遠に防ぐことができるのです。

陰と陽のバランス

私は、第二世代が、相互に関連しつつも極めて異なる二つの現実――一方では個人の夢、他方では他者の夢の管理者としての受け継がれた責任――を自らの旅路にうまく統合するという課題を抱えて人生を歩み始めるのだと指摘したい。[20] ごく最近、私はこの第二世代の驚くべき旅路を視覚化する方法を授かった。その図は次の通りである：



陰陽のシンボルの中に、第二世代の家族の一員の旅路と精神の両面を見出したのです。この世代の旅路がなぜこれほど複雑なのか、その理由が突然明らかになりました。それは、自ら選んだ旅と受け継いだ旅という、二つの旅を同時に歩むことを求められるからです。第二世代の家族構成員の「自己」の両面が、常にそれぞれの

陰と陽の両面を常に生き続けなければならない旅路です。陰と陽の両面は常に繋がりつつも、常に分離しているのです。陰陽のシンボルが持つ精神的な深みこそが、第二世代の家族成員の旅路の複雑さを完全に表現できるのです。

では、この現実――相互につながりつつも分離した二つの意識の統一――は、どのようにして健全に表現されれば、第二世代の家族構成員が、自己認識、自己の自由、そして人生における幸福の最高度を達成できるのだろうか？

まず、第二世代の家族の幸福を達成するために、どのようなプロセスがしばしばうまくいかないのでしょうか？成人生活の初期において、第二世代の家族は、しばしば二つの深刻な心理的発達上のジレンマに直面します。 (a) 第一世代の親は、自分たちが夢の具現化として有形に築き上げた資産の管理者・保全者となるよう、子供に資産管理を学ばせようとする一方で、子供自身の人間的・知的成長や、自身の夢の実現に役立つあらゆる学びを排除してしまうこと、および (b) 親が、並外れた発見者・創造者として、

彼らに、自分自身の夢を犠牲にして、親の夢を生きさせようとする。

[21] これらの心理的ジレンマの両方を、第二世代の成員が自らの運命として受け入れてしまうと、彼らは決して個性を確立することができず、その人生はほぼ確実に破滅へと向かうことになる。なぜだろうか？ それは、彼らが決して自らの夢を現実のものにしようとしないからである。これは家族にとっての悲劇である。なぜなら、それはことわざが

家族が第二世代において人的・知的資本の成長に失敗し、

、そしてそれに伴うエントロピーが次世代で完全に顕在化する、まさにその停滞と停滞へと導くからです。第二世代の第一世代によるこれらの要求のいずれか、あるいはさらに悪いことに両方が家族の生活を支配してしまう場合、私の経験上、ことわざが常に勝つのです。

---

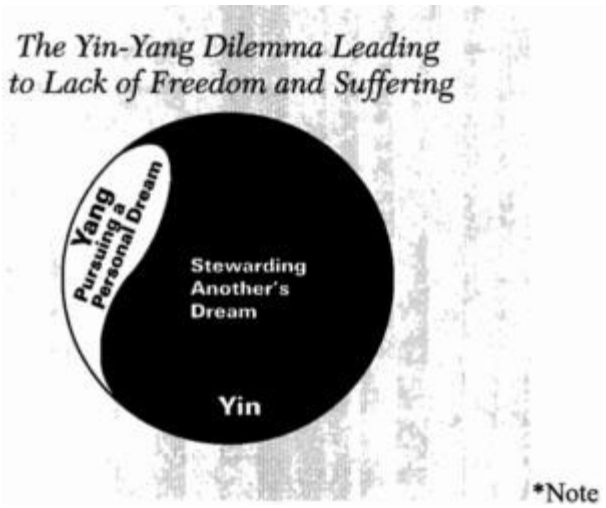
20. おそらく、第二世代の問題をこのような観点から考えたことがなかったため、この現実に驚かれるかもしれません。しかし、世界人口のごくわずかな割合しか巨額の金融資本を相続しない（この現実を生まれながらに背負って生まれてこない）ことを理解すれば、これほど驚くことではないでしょう。したがって、社会科学者にとってはそれほど重大な問題ではないのです。しかし、そうした人々に奉仕する私たちにとっては、これは極めて重要な問題なのです。

21. 創業者の夢が持つ力の本質は、往々にして十分に理解されていません。その力がどれほど並外れて強大であるか、一つの見方を提示させてください。 地球上に暮らす約70億人のうち、前夜に夢見た何十億もの夢のうち、朝になってそのうちのたった一つでも思い出せる人はどれほどいるでしょうか？ 実際には、ごくわずかです。次に、その夢を思い出せる数少ない人の中で、3日後にその夢を思い出せる人はどれほどいるでしょうか？ 極めて、極めて、極めて少数です。さらに、その夢を思い出せる人の中で、
その夢が意識の中に残り、アイデアとなる人はどれほどいるでしょうか？ ごく、ごく、ごく、ごくわずかです。次に、そのような夢がアイデアとなった人の中で、そのアイデアのうち、企業としてなど、何らかの形で具現化されるものはどれほどあるでしょうか？ ごく、ごく、ごく、ごく、ごくわずかです。最後に、具現化されたアイデアのうち、

莫大な富を生み出すでしょうか？毎晩夢見られる何十億もの夢のうち、その数はあまりにも少なく、統計的に見てあり得ないほどです。そうです、これらは不可能な夢なのです——その「不可能さ」こそが力強く、まさに圧倒的です！！

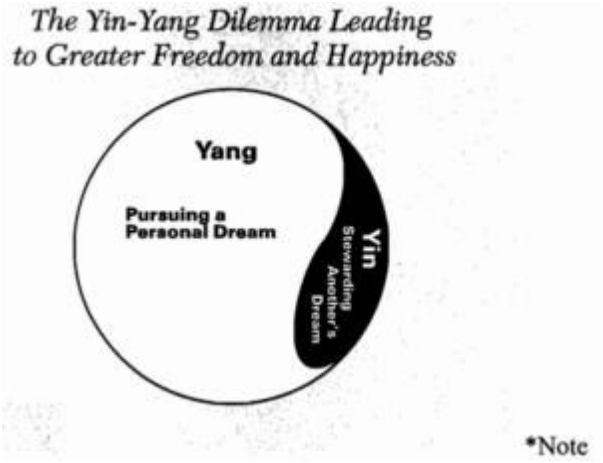
開発における陰と陽

第二世代の幸福を実現するためには、何が有効なのでしょうか？私は、家族を支援する多くの人々の考え方の中に、明らかにすべき誤謬があると考えています。それは、第一世代のクライアントの願望に基づいており、第二世代のメンバーを、発見や創造性という独自の夢を持つ「個人の夢想家」としてではなく、単に「管理者／保全者」としてのみ定義する、ほぼ普遍的な見方です。 家族の幸福について論じる専門家たちからは、すべての家族構成員が夢を持つ必要があり、家族システムはそうしたそれぞれの夢が成功裏に実現されるよう積極的に支援するように組織されるべきだという、ありふれた言葉を数多く耳にしたり読んだりしてきました。しかし、そうした専門家たちが、この目標を達成するためのシステムを積極的に構築しているのを目にしたことは、ほとんどありません。 こうした仕組みは、あまりにも頻繁に、第二世代のメンバーの人格における「陰」の部分、すなわち他者の夢の管理者・守護者としての側面の発達を促進するに留まってしまう。



これは、言葉だけでなく行動で示さなければならない事例です。つまり、

個人の夢の「陽」の側面が、相互に結びついた「陰」と「陽」からなる第二世代の自己の発達を主導し、第二世代の各個人の夢が浮かび上がるまで、家族システムを構築しなければならないということです。



そのような仕組みがどのように機能するかの例として、家族の履歴書に関する私の最初の質問——「14歳か15歳の頃の夢は何でしたか？」——を思い出してほしい。これは、その人自身の夢が重要であることを伝える種類の質問だ。これは、第一世代が第二世代の子供たちに、彼らが70歳になり、子供たちがすでに

70歳になり、子供たちが40代になった頃に初めて開かれる「第1回家族会議」の際ではなく、14歳の時に問いかけるべき質問なのです。

40代になった時に初めて開かれる「最初の家族会議」の席で尋ねるべきではないのです。私の著書『ファミリー』で論じたように、この質問は、第二世代の叔父や叔母、メンター、そして「親密な顧問団」――つまり最も重要な助言者たち――によって投げかけられるべきものです。

私の考えでは、この問いは何度投げかけても足りないほどだ。そう、あなたは「なるほど、その通りだ」と言うだろう。しかし、第一世代は自らの夢に夢中になりすぎて、他の人にそのような質問をする時間などないのだ。 そう、そこが問題の核心であり、第二世代の幸福に潜むリスクであり、将来的に予測される事態なのです。とはいえ、この問いと、そこから派生し、夢の実現へとつながり得る多くの問いこそが、第二世代が自身の成長課題において、他人の夢の管理や維持に留まってしまうこと――そのような結果が歴史的に予言してきたように、家族の幸福にとって否定的な結末をもたらすこと――を防ぐための、私が見出すことのできる唯一の解毒剤なのです。

また、第二世代の家族の一員が自分の夢を見つけ、家族の励ましを受けて、その天職という夢を現実のものにするために師匠のもとで修行に励んだとしても、その人が自分の「陰」の側面を活かすことを妨げるものではないように思えます。 むしろ、その夢を極め、そこから生まれる自己の修養を通じて、人生の後半には、同じ弟子入りのプロセスを用いて自身の「陰」の側面を活性化させ、他者の夢、ひいては次世代の夢さえも、活力に満ちた管理者・守護者となることを学ぶ自然な機会が訪れるのではないかと私は考えます！ [22] しかし、陽のプロセスが犠牲にならないよう、陰を陽に従わせることは、その人が第二世代として人生に抱えてきた二つの課題の

第二世代としての人生において、生まれながらに抱える二つの課題の健全なバランスを確立できる可能性が高まると私は考えています。

もし家族が、第二世代のメンバーにおいて陰と陽の自己を自在に使いこなし、夢想家であり継承者となる能力を育むことができれば、その家族は、第二世代のメンバーが家族のあらゆる形態の資本のダイナミックな生み出し手となるために最も必要とされる方法で、この世代の人材資本と知的資本の成長を実現できたことになるでしょう。 繰り返しになりますが、これをうまく行うためには、夢想家が先導し、継承者がそれに続き、その後、継承者が次世代の新たな夢に投資するという好循環が生まれる必要があります。このプロセスが第二世代で学び実践され、その後すべての世代で一貫して適用されれば、その家族は、ことわざが示すような「第二世代における停滞の呪い」を回避できると私は信じています。 同様に、現在の第二世代の家族構成員が、ここで提唱されている通り、次の世代に向けた同じ導入的実践に従うならば、将来の家族構成員が第三世代的な振る舞いを見せる可能性は低くなるだろう。これで、続くすべての世代が同じ陰陽の課題に直面していることがお分かりいただけたと思う。最も成功する家族とは、この課題を認識し、それを受け入れ、家族全体および個々の構成員の最高の繁栄に向けて積極的に管理していく家族である。

---

22 まだ確信は持てませんが、私は次第に、ダイナミックな

他者の金融資本を管理・保全する活動が、人生の第三段階の仕事となり得るのではないかという見解に傾きつつあります。それは、発達的に私たちが遺産について最も

遺産について最も関心を寄せる時期である。これは、金融リテラシーが人生の第二段階において重要な発達課題ではないと示唆するものではない——それは確かに重要な課題である。むしろ、この課題に取り組むことに集中することは、人生の第三段階においてより自然なことであるかもしれない、ということである。

具体的な心理学的課題

本章の残りの部分では、私が家族の中で観察してきた具体的な心理的課題、およびそれらの課題について情報を提供し、その前向きな解決に向けた推奨する療法についても教えてくれた著者たちの見解に焦点を当てていく。

子どもの発達

まず、私の親愛なる友人であり同僚であるリー・ハウスナーの研究から始めたいと思います。リーは、私の見解では、この分野において最も有能な家族療法士および家族心理カウンセラーの一人です。セラピストとしての活動に加え、彼女は優れた家族教育者でもあります。 彼女は、家族機能不全が存在する「計算式」のマイナス側、家族が「初心」を持つ「ゼロ」の地点、そして家族システムが機能して家族のあらゆる資本を成長させる「プラス」の側へと、シームレスに行き来できる数少ない人物の一人です。リーは私がこれから論じる多くの分野における権威ですが、ここでは、経済的に裕福な家庭の子育てに関する彼女の研究を引用したいと思います。彼女の
著書『*Children of Paradise*』（新版が発売されたばかり）*は*、この問題について学ぶ上で私たち全員が参照するバイブルである。リーの著書は、他のどの本よりも頻繁に人に贈ってしまうため、私は常に6冊を常備している。

。本書には有益な洞察が数多くありますが、ここでは、リーが子どもたちとその可能性に対して抱く深い愛情を示す2つの発言を引用したいと思います。彼女は親に対し、子どもたちを無条件に愛するよう呼びかけ、また、他者――とりわけ極めて高い成果を上げている親――のレベルにかかわらず、子どもたちがそれぞれの能力に応じた水準で有能になれるよう支援するよう求めています。彼女のこの呼びかけは、実に的を射ています。

次に、男の子と女の子の育て方に関する5冊の本について触れておきたい。ドン・キンドロンとマイケル・トンプソンの*『レイジング・ケイン――少年の感情生活を護る』*；メアリー・パイファーの*『オフェリアを蘇らせる――思春期の少女たちの自己を救う』*；ダニエル・エルキンドの*『急かされる子どもたち――早すぎる成長』*；ケネス・ケイの*『家族のルール――怒鳴ったり小言を言ったりせずに責任感のある子どもを育てる』*；そしてロバート・コールの名著『危機に瀕する子どもたち』第5巻*『特権*

』など。

母親の具体的な役割

ここで、専門家の間でよく言われる「自分が家族の一員であるかどうかは、母親が亡くなって初めてわかるものだ」という言葉を付け加えておきます。父親も重要ですが、私の専門的な経験から言えば、母親に関するこの言葉はしばしば真実です。母親は私たちの絆を結びつける接着剤のような存在であり、物語を語り継ぐ人であり、仲介者でもあります。家族は、母親が果たすこうした重要な役割を尊重し、母親が去った後もその役割を全うするための体制を整えるために、

後継者を育成する必要があることを認識し、母が去った後もそれらの役割を果たせる体制を整えておくべきだ。

継親としての役割

次に、継親としての役割と継子としての課題についてですが、このテーマに関して非常に参考になる本として、グレース・ゲイブとジーン・リップマン＝ブルーマンによる*『ステップ・ウォーズ』*があります。

女性の発達

次に、女性の発達に関する心理学理論として、キャロル・ギリガンの*『In a Different Voice』があります。*

父親

次に、父親という存在の本質について書かれた、マーク・オコネルズの新著

『The Good Father, on Masculinity and Life in the Family』

権利意識と経済的不平等

次に触れたいのは、家族の機能不全における2つの重要な問題、すなわち「*権利意識*」と「*経済的不平等*」（女性が男性のパートナーよりも多くの経済的資本を持っている場合）です。これら2つのトピックに関する議論については、私のウェブサイト www.jamesehughes.com に掲載されている、それぞれ「贈り物の本質」および「経済的不平等」と題した『Reflections』をご覧ください。

上記に加え、チャールズ・J・サイクス著『*The Victimization of America*』は、「権利意識」とその症状である「被害者意識」をより深く理解する上で参考になります。サイクスの著作は、家族の心理的プロファイル、特にその第三
世代の心理的ウェルビーイングの状態を評価する際に活用すべきです。なぜなら、権利意識はまさにその世代特有の呪いだからです。

個々の家族構成員の不在に焦点を当てた家族システム

不在

家族生活における比喩として非常に重要な戯曲は、サミュエル・ベケットの『*ゴドーを待ちながら*』である。これは「無」をテーマとした戯曲であり、登場人物たちは自分たちのあらゆるジレンマを解決してくれる誰かがやってくるのを待ち続けるが
ジレンマを解決してくれる誰かが現れるのを待ち続けるが、その「誰か」は決して現れない。このパターンは、多くの家族における悲しい現実である。これらは、家族会議に、決して来ることのないある家族メンバーが来るのを待ち続けるうちに、行動や成長を止めてしまう家族たちである。 私は、家族の「personne de confiance」（最も信頼される助言者）として、何度も家族に対し、自分たちが家族とみなすすべての人が揃うまで行動を先延ばしにする傾向は誤りであり、それが家族を崩壊させかねないという助言をせざるを得なかった。なぜだろうか？　その人は決して来ないからであり、彼らが待つ間に、エントロピーが彼らのエネルギーを蝕んでいくからだ。 特定の「親和家族」の一員であるかどうかわからない家族メンバーに対し、忍耐強く、穏やかに家族の集まりへの参加を依頼することは、正しく適切な行動です。私が

何度も述べてきたように、どんな家族にとっても人的資産はいくらあっても足りないものです。同様に、系譜や血縁しか共有していないが、別の「親和の家族」の旅路に加わってしまった家族を待つことは、実りのない行為にエネルギーを浪費することに他なりません。ゴドットは来ず、劇は幕を閉じるのです。
決して来ない誰かを待ち続けて、あなたの家族の物語を終わらせてしまわないでください。

兄弟姉妹

次に、フランク・サロウェイの傑作『*Born to Rebel*』について触れておきたい。これは、家族内の兄弟姉妹関係、とりわけ出生順の影響について、現時点で最も優れた科学的研究である。

ビジネスにおける「長子症候群」

さて、もう一つの機能不全の症候群について見ていきましょう。これは、第一世代の男性家族成員によって企業が設立され、その男性がその企業を感情的に「長子」として扱っている家族システムです。サロウェイの素晴らしい著書を読み、出生順に起因する子供たちのありそうな行動を理解した上で、最も愛されている「長子」が人間の子供ではなく、いわば「仮想の子供」、つまり企業であるという家族システムを想像してみてください。 サロウェイの著書を読んでいない方でも、長子、次子、三子にどのような行動が見られ、それぞれがそうした行動を通じてどのように個性を確立し、家族システムに統合されていくかについて、ほぼ間違いなく何らかの見解をお持ちでしょう。ここで、

、ご自身の兄弟姉妹の出生順に関する経験や知識に、もしそれらの行動が、父親が最も愛する非人間的な「長子」によって支配されることになったらどうなるか、と自問してみてください。 そうすれば、家族の正常な発展や、子供たちの成人後の人格形成が極めて困難になるだろう、と皆さんもお考えになるはずです。それは、関係者全員にとってトラウマとなり、感情的に混沌とした状況をもたらす可能性が高いでしょう。その通りです。この分野の専門家たちは、この症候群を認識しており、互いに議論しています。私が驚くのは、私が話すセラピストのうち、この症候群について正式に教わったことがある人がいかに少ないかということです。彼らは、実務の中でケースごとに自ら発見せざるを得なかったのです。 ここでこの話題を取り上げることで、企業を営む家族を支援するすべてのセラピストの意識に、このことが浸透することを願っています。また、自ら創業した企業を持つ第一世代のすべての家族の意識にも、このことが浸透することを願っています。急いで付け加えておきますが、この問題を抱える女性第一世代の企業創業者という事例を私はまだ見たことがありませんが、

現在の女性の社会的革命の隆盛に伴い、そのような人物が現れる可能性は高い。

—

創業者の夢の相互作用

と

パイオニアと次世代およびそれ以降の世代の夢の相互作用

次に、アイヴァン・ランスバーグの著書『*Succeeding Generations*』について論じたい。この本の中で、ランスバーグは第一世代の夢について非常に深く論じている。その世代が、個々の夢を「夢」の段階から「アイデア」の段階へとどう移行させるか、そして、その夢を生き抜く中で、そこから生まれたアイデアが十分に力強いものであれば、いかにして企業が誕生するかについてである。 さらに彼は――私が理解した限りでは――、企業には十分な生命力があり、夢からアイデアへと境界を越え、やがて繁栄する事業体となった時点で、それ自体が有機的に進化し始め、創業者の家族の第二世代や第三世代のメンバーが自らの生活に統合していかなければならない生命体となる、と説明しています。

本稿では、誰かが夢を生きることが家族の幸福に及ぼす様々な問題について論じてきたため、ここではそれらを繰り返しません。むしろ、私は「長子としてのビジネス症候群」の解決に役立てる手段として、ランスバーグの「夢」に関する考え方を紹介したいのです。もしある家族、あるいはその「信頼できる人物」が、自身や自分が仕える家族がこの症候群に陥っていることに気づいた場合、その家族がランスバーグの著書を読むことは非常に有益であると私は考えています。 その理由は、そのような夢が有機的な存在として現実のものとなった際、どれほど並外れたエネルギーと力、そして勢いを帯びるかを理解してもらうためです。夢のうち、構想の段階にすら到達するものがいかに少なく、そこからさらに事業として生まれ、それ自体が繁栄できるまでに成長するものがいかに稀であるかを思い起こせば、そのような夢がいかに並外れて活力に満ちているかがわかるでしょう。もし、そのような家族の第二世代のメンバーが、親の夢の本質や、

その夢が親をどのように飲み込んでいくのかという過程を視覚化し、体験することができれば、彼らはしばしば、父や母の子供たちの階層における自身の立場の本質について、明確な認識を持ち始めることができる。この気づきは、この症候群が引き起こす家族や個人の生活における問題を解決するものではないが、「長子としてのビジネス」症候群の現実や、それが家族のシステムや個人の生活の中でどのように作用しているかについて、家族内での対話を生み出すことになるだろう。

ジェノグラムとセラピー

次に、フレダ・ハーツ＝ブラウンの著書『*Reweaving the Family Tapestry*』と、その中で解説されているジェノグラムについてです。これは、家族システムとその仕組みについて書かれた優れた本です。特に第4章、第5章、第6章は、家族のリーダーやその上級専門職が、熟練したセラピストがどのようにして個々の患者が家族システムの中でどのような位置づけにあるかを理解し、その患者がセラピーから良好な成果を得る可能性を高めるかを把握するための手引きとして、強くお勧めします。

行動上の機能不全

A.「バッグ・レディ症候群」と一般的な機能不全。

次に、ジェシー・オニール著『*ザ・ゴールデン・ゲットー*』は、富裕層の家族に見られるさまざまな行動上の機能不全、特に彼女が「アフルエンザ」と称する病態や、その根底にある行動について論じています。

オニールさんは裕福な家庭の出身であり、彼女自身が、本書で綴っている数々の「機能不全」から回復しつつあると語っています。この本を強くお勧めします。ここでは、その内容を紹介するために、本書で述べられている「

バッグ・レディ・シンドローム」という記述を、本書を紹介する一助として用いたいと思います。オニール氏は、非常に裕福であるにもかかわらず、自分が一文無しだと信じ込んでしまうことが、高齢の富裕層の女性たちにとって、残念ながらかなり一般的な問題であると説明しています。この悲劇的な精神状態にある彼女たちが示す行動は、持ち物をすべてビニール袋に入れて持ち歩く路上生活を送る女性たちの行動とよく似ています。 私の臨床経験からも、高齢の女性が「自分が持っているのはハンドバッグの中の現金だけだ」と感じてしまうことは非常に一般的であると断言できます。オニール氏によるこの問題の描写は、彼女が論じている他のすべての問題と同様に、家族の一員がなぜ特異で不健全な行動をとっているのかを理解する助けとなり、その人が必要な専門的な支援を受けられるように導く手助けとなります。

B. 一般的な機能不全

C. 次に、セイヤー・ウィリス著*『富のダークサイドを乗り切る Wealth』*です。これは、才能ある家族療法士であり、裕福な家庭の出身者でもある著者によるもう一冊の優れた著書で、多くの機能不全的な行動を記録・分析し、それらに対する有用な治療法を紹介しています。

次に、バーバラ・ブルーインがキャサリン・ギブソン、マーガレット・キアスタッドと共同編集した*『The Legacy of Inherited Wealth』*は、相続財産を持つ個人や家族に関する多くの示唆に富む事例を紹介しています。

C. トラウマ

次に、ピーター・レヴィーンの*『Waking the Tiger』*です。レヴィーンは、トラウマ的な出来事から生じる、深く、しばしば生涯にわたる心理的ブロックを解消することに成功してきた心理療法士です。彼の著書と、それを解説する後述の素晴らしい動画の中で、レヴィーンは、トラウマ的な出来事に対する反応として、私たちには3つの可能性があることを私たちの意識と想像力に呼び起こしています。

反応があることを、私たちの意識と想像力に呼び起こしている。単に「戦う」か「逃げる」だけでなく、最も重要なのは「凍りつく」ことである。彼の研究では、差し迫った自動車事故、性的暴行、その他あらゆる種類の暴行、そして死に至ると私たちが信じるあらゆる出来事への対応といった恐怖の瞬間において、私たちは脳の太古の部分に深く刻まれたプログラムに従い、命を救おうと反応するようになっていると説明している。 多くの場合、私たちは「戦う」か「逃げる」という反応を示し、こうした事態に直面した際、私たちのほとんどはこれら二つの反応をとることを予想している。しかし実際には、トラウマによる死の危機に直面した際の実際の反応として、「凍りつく」ことを選ぶケースが、私たちが認識しているよりもはるかに多いとレヴィーンは説明している。

レバインによれば、「凍りつき」とは、戦うことも逃げることも選択肢とならない事態に反応するために、私たちの体が引き出す反応である。彼は、私たちが凍りついたとき、実際には死への恐怖が表すエネルギーを細胞の中に封じ込めていると説明する。また、自然界では動物たちが、直面している問題やその状況が提供する選択肢に応じて、これら3つの反応を用いていると述べている。そして、チーターの襲撃によって若いガゼルが死に至るであろう様子を捉えた驚くべき動画を用いて、これら3つの反応を具体的に示している。 この映像では、ガゼルがチーターの顎に捕らえられ、地面に倒れる様子が見て取れる。地面に倒れる様子が映し出される。するとチーターは、ガゼルを殺す代わりにその場を立ち去っていく。 続いて、同じ出来事がスローモーションで再び映し出されます。すると、チーターがガゼルに到達する直前に、ガゼルが恐怖で凍りついて地面に倒れ込み、その恐怖の感情のエネルギーを体内に閉じ込めていたことがわかります。チーターが立ち去った後、ガゼルがこの凍りついた状態から抜け出し、激しく体を震わせて凍りついたエネルギーを解放する様子が映し出されます。こうして解放された若いガゼルは

、再び生き生きと動き出す。同様の出来事を描いた、他にも説得力のある場面がある
。

レバインが説明するように、私たち人間という動物にとっての問題は、生命を脅かすと認識する出来事に遭遇し、それに対して「凍りつく」という反応を選んだ際、そのような凍りついたエネルギーを自動的に解放する手段を持っていないことにある。むしろ、私たち人間という動物は、このエネルギーを細胞内に閉じ込めてしまい、それを解放するための何らかの感情的なプロセスがなければ、そのエネルギーは単にそこに定着してしまうのである。 このプロセスの生化学的メカニズムは当然ながら極めて複雑であり、レヴィーンは著書の中でその科学的根拠を解説している。心理学的な観点から、レヴィーンは、私たちの身体や精神にはこのエネルギーを自然に解放する手段がないため、細胞に隠されたこの形態のエネルギーが、時間の経過とともに非常に重大な感情的な問題を引き起こすことが多いと説明している。

彼は、トラウマの被害者がしばしばそのエネルギーによって機能停止状態に陥り、その結果、多くの場合、正常に生活できなくなってしまうと説明している。素晴らしいことに、レヴィーンはトラウマによって閉塞したエネルギーを解放するための療法モデルを開発した。私自身、彼が開催したワークショップに参加したことがあり、そこで自動車事故のトラウマ被害者である参加者の一人に対する彼のセッションを目の当たりにした。 彼が彼女を優しく導き、衝突直前の瞬間に立ち返らせ、その場面を視覚化させ、そして事故そのものが起きることなく安全にその出来事を乗り越えていく様子を目の当たりにするのは、実に非凡な体験でした。その後、ガゼルで目にしたのと同じように、彼女の身体からそのエネルギーが解放されていくのを目の当たりにしたことは、深く心を揺さぶるものでした。その後、私たちは別の体験談にも触れる機会を得ました。それは、性的暴行の被害者による、深く根付いた凍りついたエネルギーの解放についての話でした。彼女の人生は

6年前に経験したトラウマによって人生が停滞していた女性による、深く根付いた凍りついたエネルギーが解放されるという別の物語を聞くという恵みにも恵まれました。

「なぜこの本のこの特定の章がここにあるのか」と疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、急いで説明させてください。私が家族を対象に仕事をしてきた中で、想像以上に頻繁に、トラウマ的な出来事から抜け出せないように見える家族メンバーに出会ってきました。その多くは、長年の心理療法を受けても何の変化も見られなかった人々でした。 私自身、2歳半の時に扁桃腺炎の手術中に死の淵をさまよった経験があり、その際に体内のエネルギーが凍結され、それ以来、何らかの健康上の問題が生じるたびにトラウマに苛まれてきたため、こうした家族の方々の心情に容易に共感することができました。悲しいことに、レヴィーンの著書や彼が提唱する「フリーズ」に関する議論に出会うまでは、彼らを助ける術がありませんでした。 今では、レヴィーンの著書を彼らに紹介し、彼らの抱える問題がトラウマ体験から解放されていないエネルギーにある可能性について考えてもらう手助けができる。そして、レヴィーンのモデルや療法が彼らに役立つかどうかを、担当のセラピストと話し合うよう促すこともできる。この新たな知識を得た多くの人々が、必要としていた解放感を見出し、それによって幸福への人生の旅路を再開する自由を手に入れたことを、私は保証できる。

D. トム・ソーヤー流——皆でフェンスを塗らせる

次に、私が支援している家族の中で、大変な仕事を成し遂げるために用いているテクニックについてお話ししたいと思います。

家族の中で、大変な仕事を成し遂げるために私が用いるテクニックについてお話ししたいと思います。このテクニックを私は「トム・ソーヤー流」と呼んでいます。皆さんの多くは、マーク・トウェイン（サミュエル・クレメンス）の傑作『トム・ソーヤー』の冒頭部分を覚えていることでしょう。トムはベッキーおばさんと台所にいて、白塗りのバケツとペイントブラシをじっと見つめており、ベッキーおばさんは

トムをじっと見つめています。二人は、家の前のピケットフェンスを塗る必要性について、トムが作業初日の二日間、様々な言い訳をしてこの仕事をサボった理由、なぜ今日が一年で最も美しい日だと感じ、今日は釣りが最高だと考えているのか、そして結局、トムが自分には無限に長く見えるフェンスの前に立たされることになる経緯について話し合います。 すると、トムが筆を手に取り、非常に不機嫌そうにペンキに浸し、気乗りしない様子で最初の板に適当に塗る場面を思い出されるだろう。その瞬間、近所の友人が

近所の友人がやって来ます。その友人は、私が要約すると、「トム、何してるの？」と言います。すると、今や意気揚々とペンキを塗っているトムは、「世界で一番楽しいことやってるよ！」と答えます。友人が「でも、トム、それって仕事みたいに見えるよ」と言うと、トムは「いや、世界で一番楽しいことさ」と返します。 この話の最後には、ペンキを塗る順番を待つ子供たちの長い列ができていることを覚えているだろう。子供たちは一人ひとりが、その「特権」を得るためにトムに何かを渡している。トムは座って微笑みながら、自分の仕事に対する報酬を集めているのだ！！

家族の中で、「家庭の重労働をすべて自分が背負っている」と不満を漏らす人がいるとき、私はよくこの話をします。彼らはそのメッセージを理解し、自分なりの「トム・ソーヤー流」を見つけ、家族を「世界で一番楽しいこと」をするために列に並ばせるようになると、素晴らしいことが起こります。

E. パラドックス。

さて、この章の締めくくりとして、多くの家族が「シャツの袖からシャツの袖へ」という諺が予言する結末に陥ってしまう根本的な理由の核心にあると私が考える、7つのパラドックスのうちの1つを紹介したい。23 これは、家族の財産を相続した第2世代が、第3世代の家族に対して、他人を疑うよう教えようとする一方で、実際には「誰も信用できない」と教えているというパラドックスである。

人々からの関心に対して懐疑的であるよう教えようとする一方で、実際には「誰も信用できない」と教えているというパラドックスである。このパラドックスを理解するために、読者の皆さんに想像していただきたい。もし子供の頃、最も信頼していた人々――両親や叔父叔母――が、その行動を通じて「誰も信用できない」と教えていたとしたら、あなたの人生はどのようなものになっていただろうか？ 今、あなたの人生がどれほど悲惨なものになっていたか、想像できるだろうか？ どれほど長く続く関係を築くことが不可能になるでしょうか？　それによって得られる自己肯定感とともに、他者に全身全霊を捧げることが、果たして可能でしょうか？　要するに、愛することを決して学べず、そのような人生がもたらす不幸という結果を、フロイトはこの「省察」の冒頭で予言していたのです。このパラドックスによって引き起こされる人間の苦しみは計り知れません。もちろん、
他人の動機に懐疑的になることを学ぶことは、大人になるために必要なスキルです。 私はそのスキルを全面的に支持し、称賛します。しかし、懐疑心から完全な不信へと陥る危険な滑り坂は現実のものであり、私は世界中のあまりにも多くの家庭でそれを目の当たりにしてきました。すべての家族が、このことを確実に理解していなければなりません。もし自分の行動が信頼を損なうものであれば、懐疑心についていくら説教してもそれを克服することはできません。私たちは、言行一致でなければならないのです。
さて、ここでこの「心理学に関する考察」を締めくくりたいと思います。心理学が人間の行動、とりわけ私たちが「家族」と呼ぶこのシステムについて提供する深い洞察の糸口が、皆さんとご家族が心理学の恵みを享受する一助となることを願っています。心理学は、ある意味で人間関係における人間の行動の研究であるため、その洞察は、私たちが

。私がここで、人間関係における自身の経験や、これまで紹介してきた偉大な思想家たちの知見から提示した洞察が、皆様のご家族が、より高い次元の自己認識、自由、幸福、そして充実した人生を実現する一助となることを願っています。

© ジェームズ・E・ヒューズ・ジュニア、
2007年 注：
ジェームズ・E・ヒューズ・ジュニア著『FAMILY』からの挿絵。ブルームバーグ・プレスの許可を得て転載。無断転載を禁じます。

アームストロング、ダイアン・G. *『退職後の悪夢――相続人や後見人から身を守る方法』*. ニューヨーク州アマースト：プロメテウス、2002年。
アーネット、ジェフリー・ジェンセン。*『エマージング・アダルトフッド』*。ニューヨーク：オックスフォード大学出版局、2004年。
ベケット、サミュエル。*『ゴドーを待ちながら』*。ニューヨーク：グローヴ、1982年。ビー、ヘレン・L. *『大人への旅』*。ニューヨーク：サイモン＆シュスター、1996年。
ブルーイン、バーバラ、ギブソン、キャサリン、キアスタッド、マーガレット。*『相続財産の遺産』*。バージニア州ブラックスバーグ：トリオ、1995年。
ボーエン、マレー。*『臨床実践における家族療法』*. ニュージャージー州ノースベール：ジェイソン・アーロンソン、1978年。
チェルノウ、ロン。*『タイタン：ジョン・S・ロックフェラー・シニアの生涯』*。ニューヨーク：ランダムハウス、1998年。

クレメンス、サミュエル。『*トム・ソーヤーの冒険*』。ニューヨーク：バーンズ・アンド・ノーブル・クラシックス、2005年。

コールズ、ロバート。『*特権階級*』、『危機の子供たち』第5巻。ニューヨーク：リトル・ブラウン、1977年。

エルキンド、ダニエル。『*The Hurried Child*』第3版。マサチューセッツ州ケンブリッジ：パーセウス、2001年。

エリクソン、エリック・H.『*児童期と社会*』. ニューヨーク：W.W.ノートン、1993年。

フィッシャー、ロバート。『*さびた鎧の騎士*』。ウィルシャー・ブック・カンパニー、1989年。

フリードマン、エドウィン・H. 『*A Failure of Nerve: Leadership in the Age of the Quick Fix*』. 原稿. エジソン・フリードマン・エステート・トラスト. メリーランド州ベセスダ, 1999年.

ゲイブ、グレース、およびジーン・リップマン＝ブルーメン。『*ステップ・ウォーズ*』。ニューヨーク：セント・マーティンズ・プレス、2004年。

ギリガン、キャロル。『*異なる声で*』 マサチューセッツ州ケンブリッジ：ハーバード大学出版局、1982年。

ハウスナー、リー。『*Children of Paradise*』第2版。カリフォルニア州アーバイン：プラザ、1998年。

ヘルツ＝ブラウン、フレダ。『*家族のタペストリーを再び織りなす*』。ニューヨーク：W.W.ノートン、1991年。

ヒルマン、ジェームズ。『*The Force of Character*』。ニューヨーク：ランダムハウス、1999年。

ホリス、ジェームズ。『*Creating a Life*』. トロント：インナー・シティ・ブックス、2001年。

_____『*ミドル・パッセージ*』. トロント：インナー・シティ・ブックス, 1993年.

ヒューズ、ジェームズ・E.『*家族の富：それを家族の中に留める*』. ニューヨーク：ブルームバーグ・プレス、2004年.

_____*『家族：世代間の契約』*. ニューヨーク：ブルームバーグ・プレス、2007年。

_____『*利他主義の道――贈り物の本質に関する考察』*は、www.jamesehughes.com からアクセス可能です。

_____、*「現代心理学と家族関係の問題に関する考察」*は、www.jamesehuges.com からアクセスできます。

_____, ジャクリーン・メリル、ジョアニー・ブロンフマン。*「財政的不平等に関する考察」*。『The Chase Journal』第IV巻第4号に初掲載。www.jamesehughes.com からアクセス可能。

ジョンソン、ロバート・A. *『私たち――ロマンチックな愛の心理学を理解する』*。ニューヨーク：ハーパー・コリンズ、1983年。

_____, *『インナー・ワーク』*。ニューヨーク：ハーパー・コリンズ、1989年。

_____, *『彼――現代心理学の理解』*. ニューヨーク：ハーパー・コリンズ、1989年。

_____, *『彼女――現代心理学の理解』*. ニューヨーク：ハーパー・コリンズ、1989年。

ジョーンズ、アラン、およびジョン・オニール。*『Seasons of Grace』*。ニューヨーク：ジョン・ワイリー・アンド・サンズ、2003年。

_____, *『トランスフォーメーション』*。ニューヨーク：ハーパーコリンズ、1991年。

_____『*あなた自身の影』*. ニューヨーク：ハーパーコリンズ、1991年。

ユング, C. G. *『回想・夢・省察』*. リチャード＆クララ・ウィンストン訳, ニューヨーク：ヴィンテージ, 1989年.

ケイ、ケネス。『*家族のルール*』。ニューヨーク：ウォーカー、1981年。

キンドロン、ダン、マイケル・トンプソン共著。『*レイジング・ケイン*』. ニューヨーク：バランタイン、1999年。

ランスバーグ、アイヴァン。『*Succeeding Generations*』。ボストン：ハーバード・ビジネス・スクール・プレス、1999年。

レヴィーン、ピーター・A.『*虎を目覚めさせる：トラウマの癒やし*』. カリフォルニア州バークレー：ノース・アトランティック、1997年。

レヴィンソン、ダニエル。『*女性の生涯の四季*』。ニューヨーク：バランタイン・ブックス、1997年。

_____『*男の人生の四季*』. ニューヨーク：バランタイン・ブックス, 1979.

マズロー、アブラハム・H. 『*存在の心理学へ*』. ニューヨーク：ヴァン・ノストランド・レインホールド、1982年。

ノイマン、エーリッヒ。『*アモールとプシュケ：女性性の精神発達*』。ラルフ・マンハイム訳。ニュージャージー州プリンストン：プリンストン大学出版局、1973年。

オコネル、マーク。『*良き父*』。ニューヨーク：スクリブナー、2005年。

オニール、ジェシー・H. 『*ゴールデン・ゲットー*』. ミネソタ州センターシティ：ヘイゼルドン、1997年。ピアジェ、ジャン、およびバルベル・イムヘルダー. 『*子どもの心理学*』ヘレン・ウィーバー訳、ニューヨーク：ベーシック、2000年。パイファー、メアリー。『*オフェリアを蘇らせる：思春期の少女たちの自己を救う*』。ニューヨーク：バランタイン、1995年。

スーザン・パイバー著。『*難しい質問：「はい」と言う前に自問すべき10の重要な質問*』。サンフランシスコ：ターチャー、2000年。

ロビンス、アレクサンドラ、アビー・ウィルナー共著。『*クォーターライフ・クライシス*』。ニューヨーク：ターチャー／パトナム、2001年。

シーヒー、ゲイル。『*パッセージズ*』. ニューヨーク：E. P. ダットン、1976年。

_____『*ニュー・パッセージズ*』. ニューヨーク：ランダムハウス、1995年。

セント・オービン、エド・デ、ダン・P・マクアダムス、キム・テチャン。『*ジェネレーティブ・ソサエティ*』. ワシントンD.C.：アメリカ心理学会、2004年。

サロウェイ、フランク・J. 『*反逆者としての生まれ：出生順位*、家族の力学、そして創造的な人生』. ニューヨーク：パンテオン・ブックス、1996年。

サイクス、チャールズ・J. 『*犠牲者の国：アメリカ人としての気質の衰退*』. ニューヨーク：セント・マーティンズ・グリフィン、1993年。

ウィリス、テイヤー・チーサム。『*富のダークサイドを乗り切る*』. オレゴン州ポートランド：ニュー・コンコード・プレス、2003年。